

しゃかのこし
車駕之古址古墳 範囲確認調査概報

1994

(財)和歌山市文化体育振興事業団

序 文

和歌山県北部を西流し、紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、河口部に広大な和歌山平野を形成します。和歌山市の所在するこの平野には遺跡が密集しており、古代より歴史的に重要な地域であったことがうかがえます。

さて、市内木ノ本地区に所在します車駕之古址古墳は、従来から古墳時代中期の前方後円墳であることはわかっていましたが、削平を受けていたことにもよりまして、その実態は不明でありました。平成元年度にこの古墳に対して開発計画が起こり、それ以来当事業団が3次にわたる発掘調査を実施してまいりました。その結果、古墳築造当初の葺石が確認されたばかりでなく、国内初の金製勾玉が発見されまして、本古墳が全国的にみても大変重要な位置を占めることが判明しました。そのような発掘調査の進展に伴いまして、地元住民の皆様をはじめとする多くの方々から保存の要望が起こり、平成4年に和歌山市土地開発公社による先行取得という形で開発対象地は保存されることとなりました。

しかし、本来の古墳の形や規模につきましては、いまだ不明確でありましたので、平成4年度から平成5年度にかけて国庫補助事業により範囲確認調査を実施してまいりました。その結果、本古墳が全長86mにも及ぶ県下屈指の大形古墳であり、周囲に整美な盾形の周濠がめぐっていることがわかり、本格的な中期古墳の姿が明らかになり、その重要性が再認識されました。ここに、その調査概要を報告いたします。

本書出版に際して、発掘調査等にあたって御協力いただいた方々にお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護に一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
理事長 海野 榮喜男

例 言

1. 本書は、和歌山市木ノ本に所在する車駕之古址古墳の範囲確認調査概報である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として平成4年度・平成5年度に(財)和歌山市文化体育振興事業団が受託して行った。
3. 本古墳における以前の調査を第1～3次調査として取り扱っているため、平成4(1992)年度を第4次調査、平成5(1993)年度を第5次調査とする。第4次調査は、1993(平成5)年3月1日から3月31日まで実施し、第5次調査は、1993(平成5)年11月29日から1994(平成6)年1月19日まで実施した。
4. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【第4次調査】

和歌山市教育委員会		(財)和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	浅井周英	理事長	海野榮喜男
文化振興課長	安井紹郎	事務局次長兼総務課長事務取扱	尾崎好昭
文化財班長	松本信明	事務主任	小松義博(調査庶務担当)
主幹補	大野左千夫	学芸員	前田敬彦(発掘調査担当)

【第5次調査・報告書刊行】

和歌山市教育委員会		(財)和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	浅井周英	理事長	海野榮喜男
文化振興課長	安井紹郎	事務局次長兼総務課長事務取扱	尾崎好昭
文化財班長	松本信明	事務主任	小松義博(調査庶務担当)
主幹補	大野左千夫	学芸員補	井馬好英(発掘調査担当)
主事	前田敬彦	学芸員補	奥村 薫(発掘調査担当)

5. 出土遺物の整理及び本書の執筆は、和歌山市教育委員会の指導のもと各調査担当者が行い、前田が編集した。執筆分担については以下の目次のとおりである。
6. 遺跡・遺構の写真については、各担当者が撮影し、遺物の写真は前田が撮影した。
7. 写真図版の遺物の番号は、実測図の番号に一致する。
8. 文化庁記念物課・文化財調査官松村恵司氏には、現地において御指導を賜った。厚く御礼申し上げるところである。
9. 発掘調査及び遺物整理に際して以下の方々のご協力を頂いた。記して謝意を表す。

荒木健介 今山直美 岩田修二 大原さとみ 岡野恵津子 河野靖啓 木村勝美
木村二郎 京谷厚子 京谷正人 坂本森雄 真田滋子 杉浦寛 高橋秀樹 種治里美
露峰芳楠 出縄泰子 寺尾圭子 上澤真喜子 中岡ふみよ 中嶋雅土 中野圭子
中谷ひろ 成瀬満里 西野律子 冨加見百合子 藤田裕美子 藤本とよ子 本田浩史
前田智子 松岡美恵子 三木康雄 三木礼子 水田久枝 宮崎英子 宮本清茂
本木健一 山岡真巳 山野晃司 (五十音順、敬称略)

目次

1. 位置と環境	（前田敬彦）	1
2. 既往の調査	（前田）	2
3. 調査内容		
(1) 平成4(1992)年度 一第4次調査一	（前田）	5
1 トレンチ	2 トレンチ	3 トレンチ
4 トレンチ	5 トレンチ	6 トレンチ
7 トレンチ	8 トレンチ	
(2) 平成5(1993)年度 一第5次調査一	（井馬好英・奥村薫）	9
9 トレンチ（井馬）	10 トレンチ（井馬）	11 トレンチ（奥村）
12 トレンチ（井馬）	13 トレンチ（井馬）	14 トレンチ（奥村）
4. 出土遺物		
(1) 円筒埴輪	（井馬）	14
(2) 朝顔形埴輪	（奥村）	17
(3) 形象埴輪	（井馬）	18
(4) 平安～室町時代の遺物	（井馬）	18
(5) 土錘	（井馬）	20
5. 小結	（前田）	20
(1) 古墳の墳形と規模		
(2) 古墳の構造		
(3) 周濠と外堤		
(4) 埴輪		
(5) 古墳築造年代と位置づけ		

挿図目次

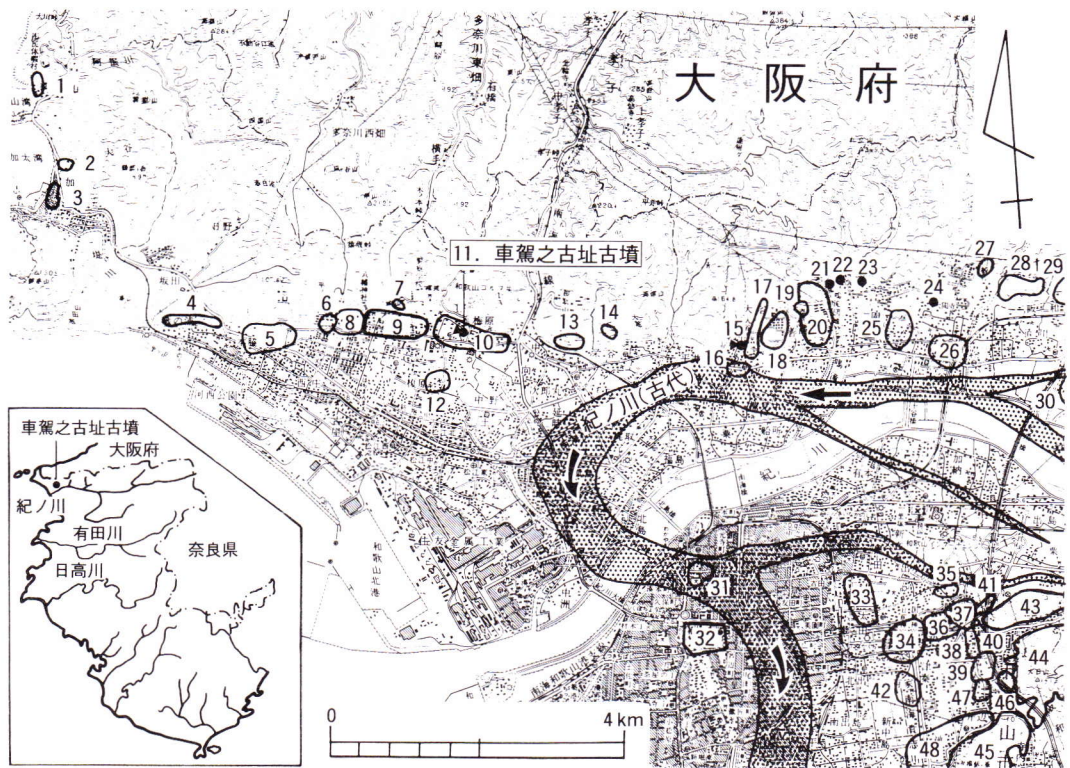
第1図	遺跡分布図	1
第2図	第2～3次調査と1986年調査トレンチの位置	3
第3図	トレンチ配置図	5
第4図	1～3トレンチ実測図	7
第5図	4～8トレンチ実測図	8
第6図	9～11トレンチ実測図	11
第7図	12～14トレンチ実測図	12
第8図	円筒埴輪1	15
第9図	円筒埴輪2	16
第10図	朝顔形埴輪・形象埴輪・平安～室町時代の遺物・土錘	19
第11図	墳丘・周濠復元図	21

1. 位置と環境 (第1図)

和歌山県の北端を西流する紀ノ川は、河口部に和歌山平野を形成する。^{しかのこし(注1)}車駕之古址古墳は、和歌山平野の北西部、和泉山脈の山麓部の平地に立地する和歌山県下で最大級の前方後円墳である。また、西方約150mに位置する茶臼山古墳(前方後円墳 規模不明)と南東約100mに位置する釜山古墳(円墳 直径約40m)を含めて木ノ本(釜山)古墳群と呼ばれる。

和泉山脈は、白亜紀の砂岩及び泥岩からなる地塁状の山地であり、車駕之古址古墳の葺石にも長さ10~40cm程度の和泉砂岩の河原石が大量に使用される。本古墳は、和泉山脈の山裾部にほど近い、標高3~4m前後の平地に立地し、周囲は水田・畑と若干の宅地となっている。

古代においては、海岸線に沿って大規模な砂堆が形成されていたために、古紀ノ川は現



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	深山遺跡	13	高芝古墳群	25	有功遺跡	37	鳴神Ⅳ遺跡
2	大谷川遺跡	14	川原崎古墳群	26	六十谷遺跡	38	鳴神Ⅲ遺跡
3	加太遺跡	15	大谷古墳	27	六十谷古墳群	39	鳴神Ⅱ遺跡
4	磯の浦古墳群	16	桶見遺跡	28	北山古墳群	40	鳴神貝塚
5	西庄遺跡	17	晒山古墳群	29	橘谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	41	音浦遺跡
6	西庄Ⅱ遺跡	18	雨が谷古墳群	30	田屋遺跡	42	津秦遺跡
7	城山遺跡	19	鳴滝遺跡	31	鷺の森遺跡	43	花山古墳群
8	木ノ本Ⅰ遺跡	20	鳴滝古墳群	32	史跡和歌山城	44	岩橋千塚古墳群
9	木ノ本Ⅱ遺跡	21	奥出古墳	33	太田黒田遺跡	45	井辺前山古墳群
10	木ノ本Ⅲ遺跡	22	有功経塚	34	秋月遺跡	46	大日山Ⅰ遺跡
11	車駕之古址古墳	23	園部円山古墳	35	鳴神Ⅵ遺跡	47	井辺Ⅱ遺跡
12	榎原遺跡	24	大同寺古墳	36	鳴神Ⅴ遺跡	48	井辺遺跡

第1図 遺跡分布図(古代の紀ノ川の流路は注2文献等による)

在のように直線的に西流していたのではなく、本古墳の南東約2kmの地点において屈曲して南流し、和歌山城のある岡山の東を流れていたとされる^(注2)。そのため、本古墳の南側の低地には、ラグーンと呼ばれる潟湖状の地形が展開していたと想定されている。古墳周辺の微地形を検討された額田雅裕氏により、木ノ本古墳群は沿岸州をなしていた砂層を基盤にして立地すると指摘されている^(注3)。

遺跡は、紀ノ川河口部の低地を避けるように平野部周囲の丘陵部や山裾の平地・扇状地上に分布する。本古墳の周辺において、旧石器時代の遺跡は顕著でなく、わずかに西庄遺跡・鳴滝遺跡でナイフ形石器の出土が知られるのみである。

縄文時代の遺跡としては、大谷川遺跡・木ノ本II遺跡・六十谷遺跡^{むそた}・鳴神貝塚が挙げられる。大谷川遺跡からは後期前半の土器が、また木ノ本II遺跡からは晩期後半の突帯文土器が出土している。鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として有名であり、前期から後期までの土器を出土し、貝塚内からは女性の伸展葬の人骨が見つかった。

弥生時代の主な遺跡としては、太田黒田遺跡・橘谷遺跡・木ノ本I遺跡がある。太田黒田遺跡は、前期から中期の県下最大級の弥生遺跡で、縄文土器の伝統をひく「紀伊型」甕が多数製作される。橘谷遺跡は、標高約100mの丘陵上などに展開する後期初頭前後の高地性集落であり、住居址や上端幅2.5～3m、深さ1～2mもの空濠が発見されている。太田黒田遺跡からは、外縁紐式袈裟禪文銅鐸、橘谷遺跡からは、扁平紐式袈裟禪文銅鐸が出土している。木ノ本I遺跡からは、弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴式住居址が数棟検出されている。また、楠見遺跡・鳴神貝塚からは、弥生前期の土器が出土している。

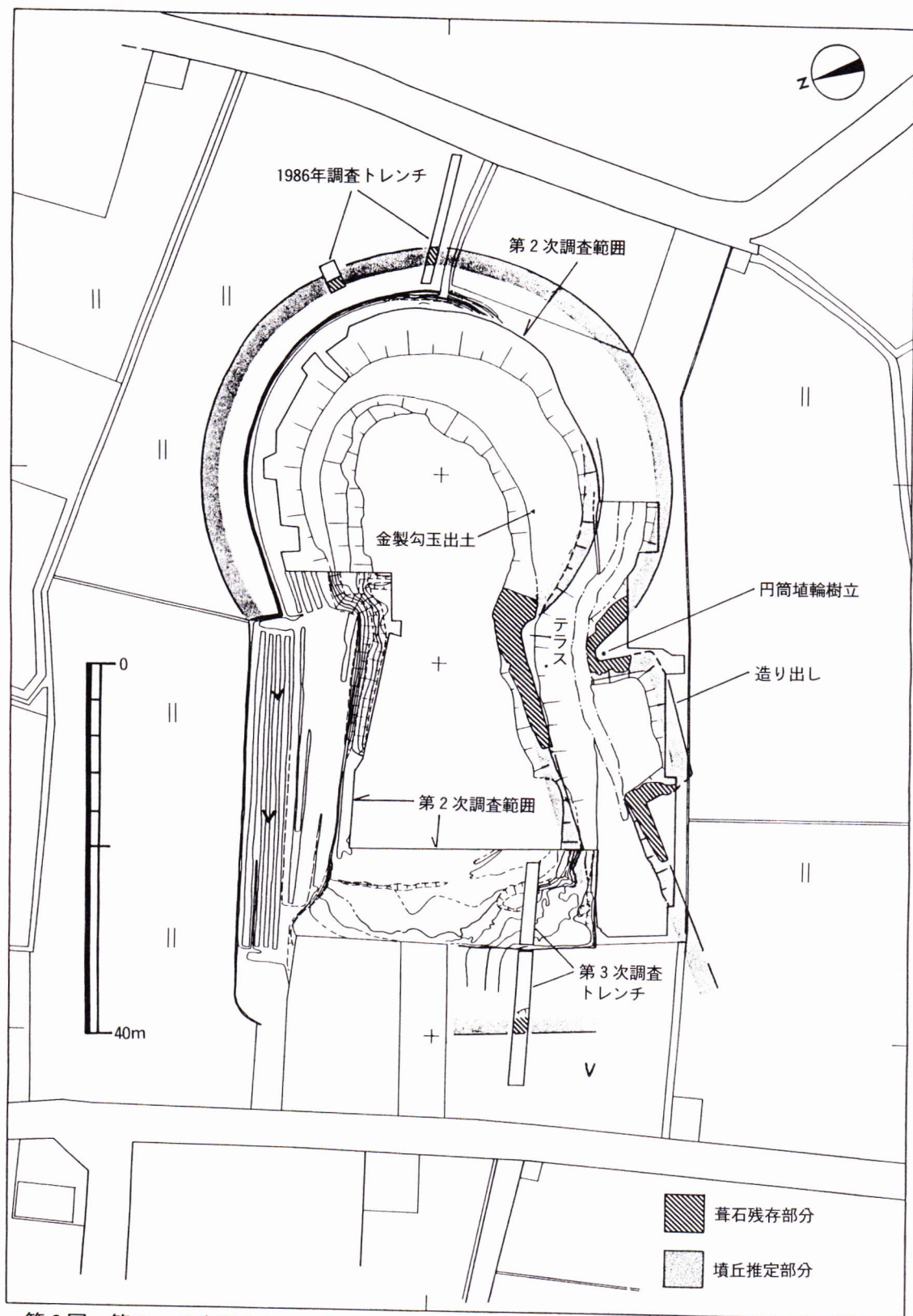
古墳時代になると、河口平野の周囲の丘陵上に多数の古墳が築造される。本古墳の東約4kmの位置には、馬冑・馬甲の出土で全国的に有名な大谷古墳（前方後円墳 全長約70m）が存在する。大谷古墳の周辺には、晒山古墳群^{さらしやま}・雨が谷古墳群・鳴滝古墳群など、古墳時代中期～後期の古墳群が集中的に形成される。紀ノ川南岸の岩橋丘陵周辺では、4世紀末頃から7世紀中頃にかけて継続的に古墳の築造が続けられ、総数600基を越す大規模な古墳群、岩橋千塚古墳群が形成される。

古墳時代の集落としては、田屋遺跡^{たや}・鳴神II～VI遺跡・音浦遺跡・大日山I遺跡が挙げられる。田屋遺跡では、全国的にみても古い段階の造りつけ竈をもつ住居址が見つかった。岩橋千塚古墳群のある丘陵西裾部に立地する大日山I遺跡は、滑石製品や鳥形土器など祭祀関係の遺物の出土が目立つ遺跡である。鳴神遺跡群からは、古墳時代の溝が多数検出される。また、鳴滝遺跡からは、古墳時代としては最大級の規模をもつ7棟の掘立柱建物が、整然とした配置をもって検出されている。

2. 既往の調査（第2・3図）

昭和61(1986)年の調査^(注4)

車駕之古址古墳の推定周濠部に北接する水田における木ノ本児童会館建設に伴う木ノ本



第2図 第2～3次調査と1986年調査トレンチの位置 (注1文献より)

Ⅲ遺跡の調査時に、幅4～5m、深さ0.35～0.5mの「大溝」が検出された(第3図参照)。この溝の方向が古墳の主軸にほぼ平行することや、溝の南側斜面に直径10～20cmの砂岩の円礫が葺石状にはりついて検出されたこと、さらに溝内に車駕之古址古墳に関連するとみられる埴輪が多数包含されていたことより、この溝が外堤の外側を区画する「外周溝」である可能性が指摘された。また、同時に行われた後円部外側の水田の2ヶ所のトレンチ調査と墳丘の測量調査により、本古墳が全長75～80m、後円部直径約50m、前方部長約30m、前方部幅約50m、高さ3.5m以上の規模をもつことが判明し、基礎的なデータが得られた。

平成元(1989)年度 一第1次調査一

開発計画に対処するために、古墳の詳細な測量図作成し、墳丘上に12ヶ所のトレンチ調査を実施した。トレンチ調査により主体部は検出されなかったものの、後円部斜面の堆積土よりガラス小玉11点と碧玉製管玉1点が検出され、副葬品の一部が二次的移動をうけ、後円部斜面の堆積上に包含されている状況が認められた。また、前方部南斜面の2ヶ所のトレンチにおいて墳丘二段目の葺石が長さ9m以上遺存しているのが確認された。葺石には和泉砂岩の河原石が多く使用され、一部に緑色片岩の河原石もみられた。

平成2(1990)年度 一第2次調査一

引き続き開発計画に対処するために、墳丘上を面的に調査した。その結果、墳丘南側において後円部から前方部に続く一段目の葺石が検出され、長さ約16mの造り出しをもつことも判明した。葺石基底石のレベルが標高2.2m前後で検出され、周辺における木ノ本Ⅲ遺跡の調査における遺構面の標高との比較により、古墳の周囲に周濠が巡っていることが、水田区画だけでなくレベル差の点でも裏付けされた。また、後円部南斜面の堆積土より国内で初めて金製勾玉が出土し、全国的に注目されるにいたった。造り出しを挟んだ東西の周濠内堆積土より、多数の円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が発見された。円筒埴輪のうちの1本は、くびれ部の周濠内に樹立した状態で発見された。通常の埴輪列とは異なる使用方法であり注意される。形象埴輪には、家・囲み・蓋等がみられ、とくに囲み形埴輪は写実的につくられている上にほぼ全体像を復元できる貴重な資料である。周濠・段築・葺石・造り出し・豊富な埴輪など、本格的な中期古墳であることが立証された。

平成2(1990)年度 一第3次調査一

前方部の範囲確認と後円部の斜面堆積土の水洗洗浄を実施した。前方部に設定した2ヶ所のトレンチのうち、西側のトレンチにおいて、前方部端部の葺石の一部と斜面を検出したことにより、古墳の全長が約84mになることが推定された。第1次調査により、後円部斜面の堆積上にガラス小玉が包含されていることが判明したために、第2次調査時には後円部斜面の堆積土を表上を除いて土のう袋に収納した。この土のう袋の洗浄を部分的におこなったところ、直径2～9mmのガラス玉が200点以上発見された。色調としては、濃いブルーが大半でその他、透明・赤・黄・緑・茶色が少量ずつみられる。土のう袋の洗浄が完了すれば、ガラス小玉の総数もかなり増加するものと推定された。

3. 調査内容 (第3～7図)

(1) 平成4(1992)年度 一第4次調査一 (第4・5図)

本来の古墳の規模と外堤等の構造を確認するために、周囲の水田・畑に8ヶ所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。

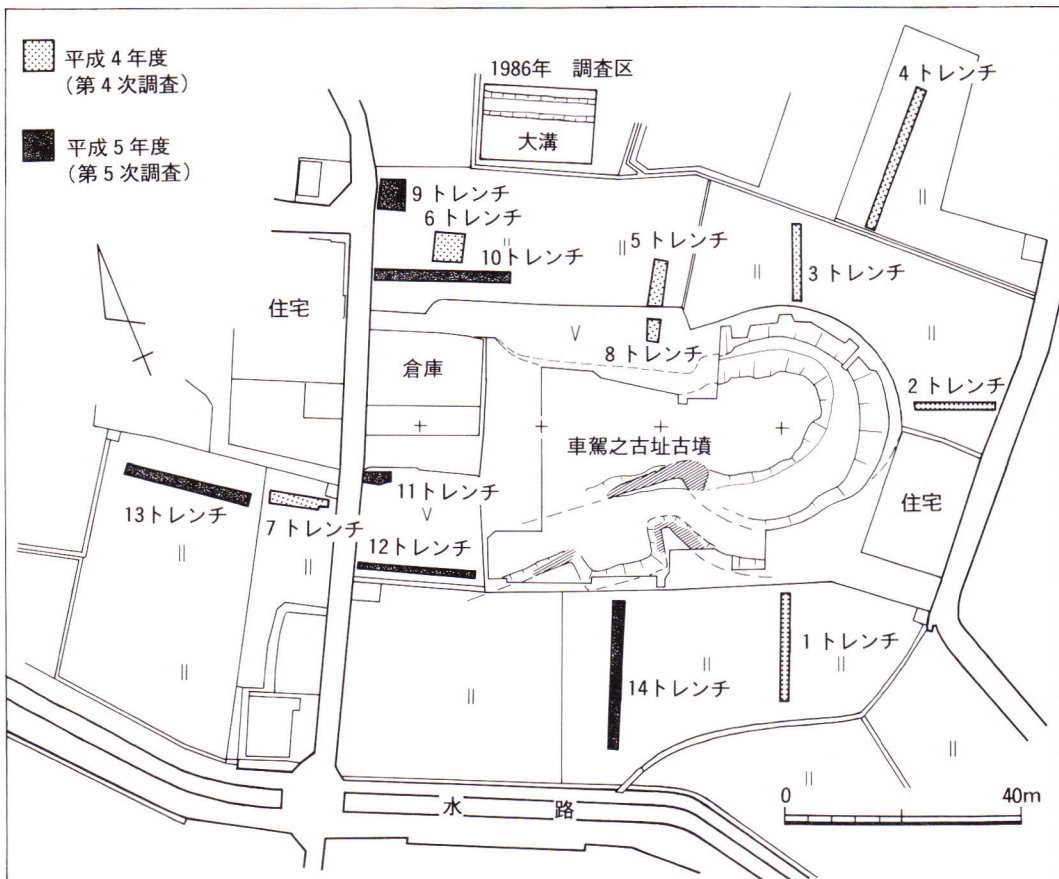
1トレンチ (第4図、図版1-2) 後円部南側の水田に設定したトレンチで、水田面の標高は約2.9mである。厚さ20cmの耕作土、厚さ5cmの床土の下層には厚さ40cmの淡褐色砂質土

(③a～③b層)、厚さ60cmの灰褐色砂質土(④a～④b層)、厚さ10cmの暗灰褐色粘質土(⑤層)が堆積する。標高約1.8mより下層は、無遺物の灰色砂層とみられる。遺物は、埴輪や瓦器・土師器の小破片が③～④層より出土し、⑤層からは埴輪の出土が目立つ。

第2次調査の成果により、1トレンチの仮0ポイントの北約2.8mの地点において後円部の南端部が位置するものと推定されるが、この仮0ポイントより南へ約9mの地点で、第⑥層が傾斜をもって20cmほど南へむかい上昇するのが確認された。この傾斜地点で直径

トレンチ名	規模	面積
1トレンチ	20×2m	40m ²
2トレンチ	16×2m	32m ²
3トレンチ	15×2m	30m ²
4トレンチ	25×2m	50m ²
5トレンチ	3×7m	21m ²
6トレンチ	6×6m	36m ²
7トレンチ	12×2.5m	30m ²
8トレンチ	2.5×4m	10m ²
合計		249m ²

第1表 第4次調査面積



第3図 トレンチ配置図

10cmほどの和泉砂岩の転石が若干出土することから、この部分が本来の周濠外側の立ち上がり部分に相当するとみられる。さらに南側は、標高約2mで平坦面が続き、中世期に大規模な削平を受けたことが考えられる。周濠底面の幅は約12m、底面レベルは、標高約1.8mである。

2トレンチ（第4図、図版1-3） 後円部東側の水田に設定したトレンチで、水田面の標高は3.8m前後である。厚さ20cmの耕作土、厚さ5cmの床土の下層は、灰茶褐色系の砂質土である③～④f層が厚さ1.2mも堆積する。最下層には厚さ10～20cmの青灰色粘土（⑥層）が堆積する。中世期の瓦器・土師器・青磁等を包含する④f層まで除去した段階で、後円部と外堤の葺石が検出された。トレンチ西側で長さ約1.8m分検出された後円部の葺石は、遺存状態が悪く、大部分が原位置を保っていない。外堤側の葺石は、長さ2m分検出され、長さ20cmほどの和泉砂岩の角石が並んでいるのが認められた。葺石部分の積み上げの角度は、後円部側で約20度、外堤側で約15度と推定される。墳丘や外堤葺石の裾部を明確にする列石が検出されていないため、周濠幅は不明確ではあるが、周濠底面幅は約7mと推定される。

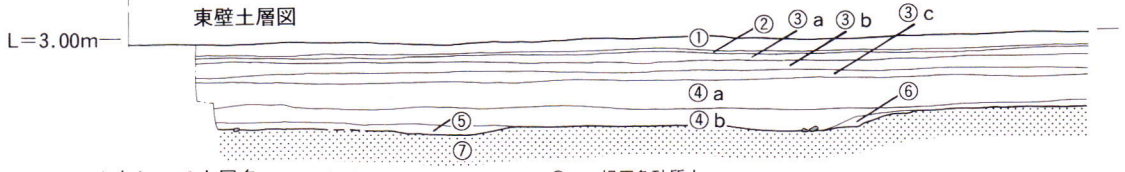
3トレンチ（第4図、図版2-1・2） 後円部北側に設定したトレンチである。水田面の標高は3.8m前後である。土層の堆積状況は、2トレンチに類似し、耕作土・床土の下層には、厚さ0.6～1.4mの灰茶褐色系の砂質土がみられる。標高3m以下の④d～④f・⑤層は、周濠内の堆積であるが、中世期の瓦器・土師器と埴輪がともに出土する。最下層の⑥層からは、埴輪が出土する。

後円部側の葺石は、長さ10～20cmのやや小振りな砂岩が使用されているが、明確に並べられた箇所は判別できない。外堤側の葺石は比較的遺存状態が良く、長さ10～35cmほどの砂岩の角石が並べられて検出された。葺石の積み上げの角度は、外堤側で約15度である。外堤側の葺石の並び方よりみて周濠のプランは、前方部に向かい広がるものと考えられる。周濠の底面幅は約5m、標高約2mである。

4トレンチ（第5図、図版2-3・4） 最も北側に設定したトレンチで、水田面の標高も最も高く、4m前後である。厚さ20cmの耕作土、厚さ4～8cmの床土の下に灰茶褐色系砂層（④層）が堆積する。この堆積層には、摩滅した埴輪や瓦器片が包含される。また、この上層は北端で厚さ10cm前後、南端で厚さ40cm前後と南側ほど厚くなる。トレンチ中央部で、幅4.5m、深さ40cmの溝SD1を検出した。南側斜面に多数の和泉砂岩の小礫をもち、埴輪片を多数包含するこの溝は、4トレンチから50mほど西で、1986年度の調査で検出された「大溝」と同一のものとみられる。溝の最下層まで中世の遺物を含み、検出面よりみても中世期の遺構と判断されるこの溝を直接、車駕之古址古墳と結び付けることはできないが、埴輪を多く含むことや古墳の外堤に平行するとみられる位置関係などから、その位置づけには注意を払う必要がある。

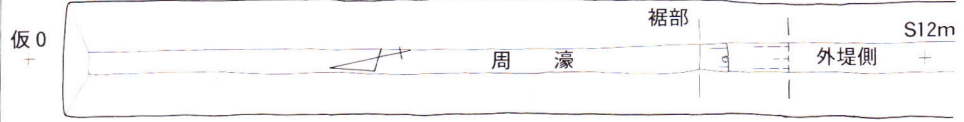
5トレンチ（第5図、図版3-1） 造り出し確認のために設定したトレンチである。水

[1 トレンチ北部]

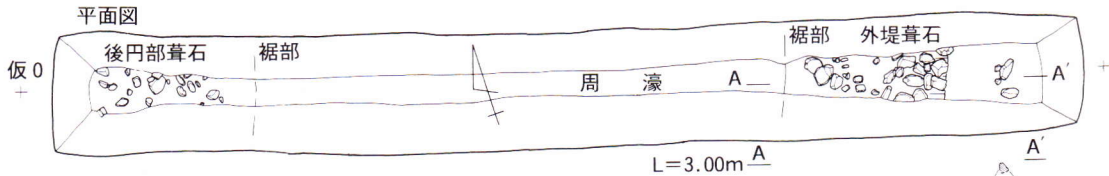
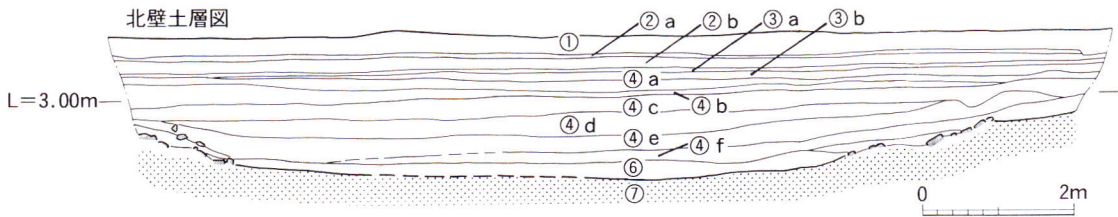


- 1 トレンチ土層名
- | | |
|------------------|------------------|
| ① 耕作土 | ③c 褐灰色砂質土 |
| ② 床土 | ④a 灰茶褐色砂質土 |
| ③a 淡褐灰色砂質土 | ④b // (④aより茶色強い) |
| ③b // (③aより褐色強し) | ⑤ 暗灰褐色やや粘質土 |
| | ⑥ 濁灰茶褐色砂質土 |
| | ⑦ 淡灰色砂層 |

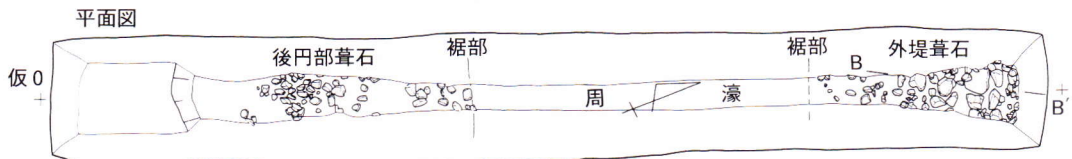
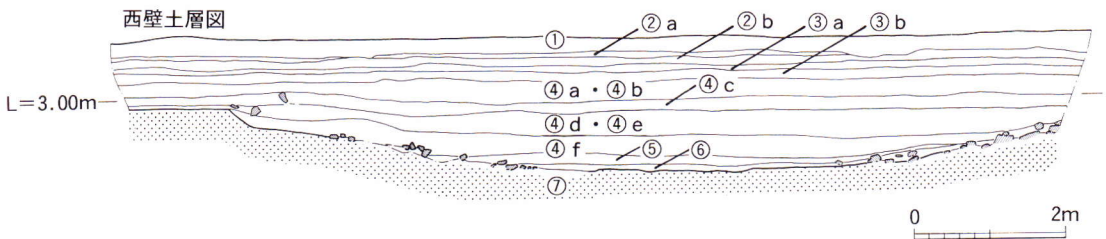
ブロック塀



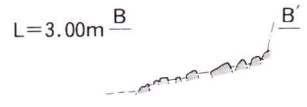
[2 トレンチ]



[3 トレンチ]



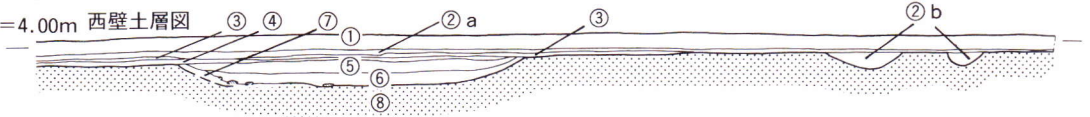
- 2・3 トレンチ土層名
- | | |
|------------------|-------------------|
| ① 耕作土 | ④c 褐灰色砂質土 |
| ②a・②b 床土 | ④d // (④cより暗褐色強い) |
| ③a 灰赤茶色砂質土 | ④e 茶褐色やや粘質土 |
| ③b // (③aより灰色強い) | ④f 茶灰色砂質土 |
| ④a 灰茶褐色砂質土 | ⑤ 茶褐色やや粘質土 |
| ④b // (④aより灰色強い) | ⑥ 青灰色粘土 |



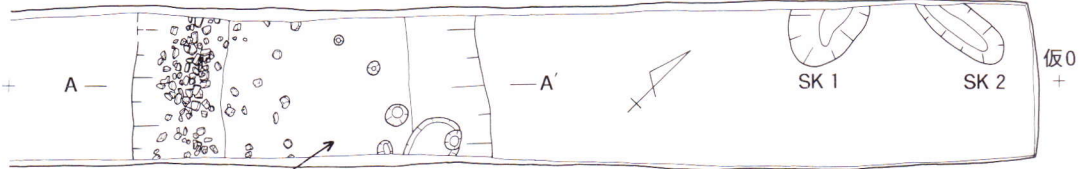
第4図 1～3 トレンチ実測図

[4 トレンチ北部]

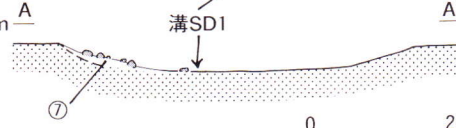
L=4.00m 西壁土層図



平面図



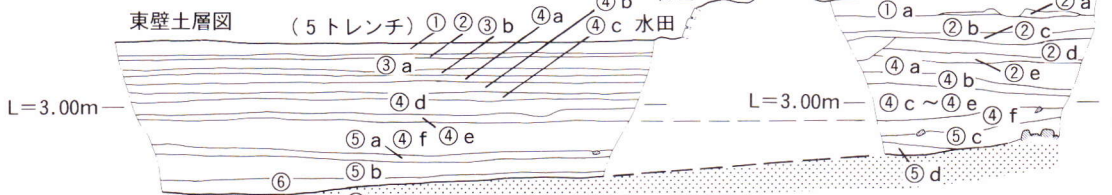
L=4.00m



- 4 トレンチ土層名
- ① 耕作土
 - ② 旧耕作土
 - ③ 床土
 - ④ 灰茶褐色砂質土
 - ⑤ 茶褐色土
 - ⑥ 暗茶褐色粘質土
 - ⑦ 茶灰褐色砂質土(SDIのウラゴメ)
 - ⑧ 淡茶色砂質土

[5・8 トレンチ]

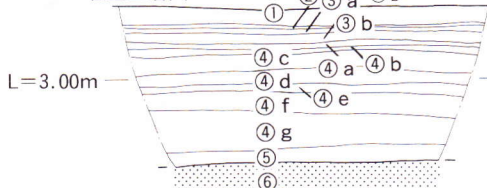
東壁土層図



5・8 トレンチ土層名

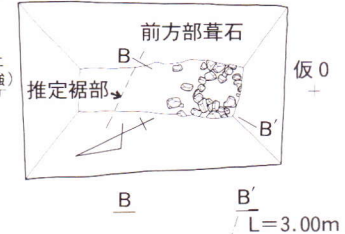
[6 トレンチ]

北壁土層図



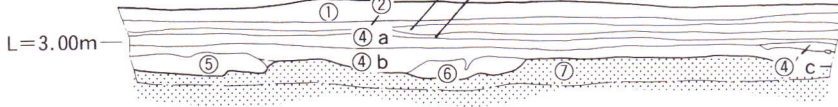
- 6 トレンチ土層名
- ① 耕作土
 - ② 床土
 - ③ a 灰褐色砂質土
 - ③ b " (③ aより茶灰色系)
 - ④ a 暗灰褐色砂質土(茶色強い)
 - ④ b " (④ aより灰色強い)
 - ④ c 灰黄茶褐色砂質土
 - ④ d " (④ cより淡灰色強い)
 - ④ e 暗茶褐色砂質土(④ dと④ fの中間層)
 - ④ f " (灰色強い)
 - ④ g "
 - ⑤ 暗青灰色粘土
 - ⑥ 暗灰色砂層

平面図



[7 トレンチ]

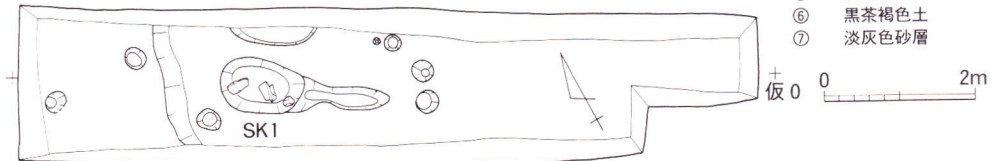
北壁土層図



7 トレンチ土層名

- ① 耕作土
- ② 床土
- ③ a 赤茶色砂質土
- ③ b " (③ aより茶色強)
- ④ a 灰茶色砂質土
- ④ b 暗茶灰色砂質土
- ④ c 茶灰色砂質土
- ⑤ 淡黄灰色土
- ⑥ 黒茶褐色土
- ⑦ 淡灰色砂層

平面図



第5図 4～8 トレンチ実測図

田面の標高は3.9mである。結果として、葺石等をもった造り出しは検出されず、周濠内部の調査となった。厚さ20cmの耕作土、厚さ5cmの床土の下層には、灰褐色系砂質土(③a～④f層)が厚さ1.2mも堆積し、さらに下層には、暗灰褐色のやや粘質土(⑤a・⑤b層)が厚さ30～50cmほど堆積する。⑤a・⑤b層は北側に向かって厚くなる。最下層には青灰色粘土(⑥層)が堆積する。その下層が青灰色砂層(⑦層)で、周濠底面となる。底面のレベルは、古墳側の南端で標高2.1m前後、周濠側の北端で標高1.9m前後となり、若干の傾斜をもっている。

遺物としては、③層に中近世の遺物を含み、④層から埴輪と瓦器・土師器の細片が出土する。⑤・⑥層からは比較的、埴輪の出土が認められる。

6トレンチ(第5図) 前方部の北西隅部を検出する目的で設定したトレンチである。水田面の標高は、約4mである。土層の堆積状況は、5トレンチに類似し、①～④f層まではほぼ共通と考えられる。ただし、④f層の下層には、5トレンチでみられたやや粘性を帯びた土層はみられず、暗茶褐色砂質土(④g層)が厚さ40～60cmほど堆積する。最下層の⑤層は、厚さ20cmほどの暗灰色粘土である。予想に反して⑤層下面に葺石は検出されず、わずかにトレンチ南西隅部で、和泉砂岩の小礫の転石が若干みられたにすぎない。⑥層上面が周濠の底面となり、標高は1.85～1.9mである。遺物は、④・⑤層より埴輪・瓦器・土師質土器が出土した。

本来の前方部北西隅は、本トレンチのわずか南か南西に位置しているものと推定された。

7トレンチ(第5図) 古墳の西側を南北に横切る道路よりさらに西側に設定したトレンチである。水田面の標高は、約3.5mである。耕作土・床土の下層には、中世の遺物を多く含む灰茶色系砂質土(③a～④c層)が厚さ40～50cmほど堆積する。この包含層下面の標高2.8m前後には、ピットや土坑の検出される中世の遺構面がある。標高2.8m以下では、無遺物の淡灰色砂層(⑦層)となり、周濠の外部であることがわかる。

8トレンチ(第5図、図版3-2) 古墳北側のくびれ部付近、5トレンチの南に設定したトレンチである。畑の耕作面の標高は、約4.4mである。①a～②d層までは、土層にしまりがなく耕作土とみられた。下層の茶褐色系砂質土(④・⑤層)の下面は傾斜をもち、直径10～20cmの和泉砂岩の円礫が検出された。これらは、遺存状態は悪いが、葺石の一部と推定された。傾斜地の下端の標高は2.3mである。

(2) 平成5(1993)年度 一第5次調査一 (第6・7図)

今年度の調査は、第4次調査で明確にできなかった前方部の端部と周濠の範囲を確認するために実施したものである。

9トレンチ(第6図、図版4-1・2) 前方部外堤の北西部を確認するために設定したトレンチである。このトレンチ内での堆積は、水田の耕作土30cm、床土15cmを測り、その下層に中世以降とみられる③a層、また、④a～④d層がやや北側に傾斜をもつ形に層位する。これらの土層は、茶灰色を主体とする砂質土であり、厚みが10cmから20cmである。

トレンチ名	規模	面積
9トレンチ	4.7×5.2m	24m ²
10トレンチ	23.5×2m	47m ²
11トレンチ	4.7×1.5m	7m ²
12トレンチ	20×1.5m	30m ²
13トレンチ	21×2m	42m ²
14トレンチ	25×2m	50m ²
合計		200m ²

第2表 第5次調査面積

④a層を排除した時点において、ほぼ中央より北側に明瞭なベース層（明黄色砂層）を検出し、この層位から掘り込まれた南北にのびる溝状遺構（SD1）と古墳の周濠と考えられる南側への落ち込みが確認できた。SD1の覆土内には埴輪片も含まれていたが、多くの遺物は瓦器や土師器であり、中世の遺構とみられる。古墳周濠内の堆積は大きく2層に分けられ、上層とは全く異なった黒灰色を主体とする粘土層であり、上層の⑤a層の方がより多くの埴輪片を包含している。また、これらの覆土にも瓦器、土師皿などが認められることから、周濠は中世まで存在し、なおかつその埋没は中世の間と考えられる。

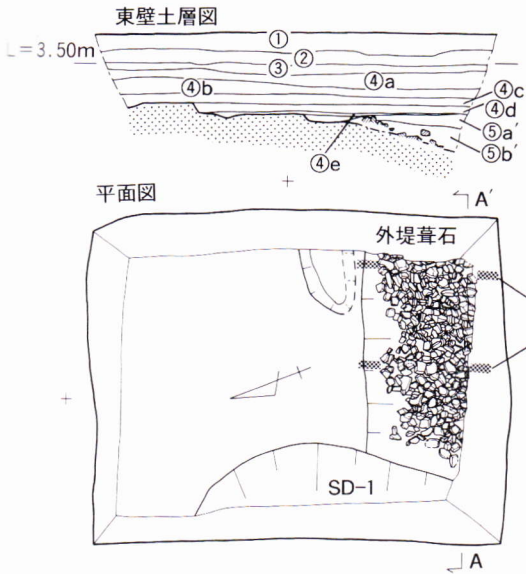
周濠の内部には丁寧に積み上げられた葺石が見られた。この葺石は濠底側から約20度の角度をもち外堤上に延び、約10cm大の和泉砂岩の河原石を多く用いている。また、このトレンチにおける葺石の構築方法は、まず20～30cm大の石を用い幅1.4mほどの区画列石を造り上げ、その中に10cm大の石を組み入れる工法が確認できた。

10トレンチ（第6図、図版3-3・4） 前方部の北西隅を確認するために設定したトレンチである。耕作面の標高および③a～④a層までの堆積は9トレンチと同様であり、また土層名も同じである。しかし、遺構検出面までの間に、ともに厚さ10cm程度の④e～④f層がほぼ水平に堆積し、トレンチ中央部において、その直下に明黄色砂層（標高約2.4m）を確認した。墳丘から西側は、仮0ポイントよりW13mの地点から西に明瞭な落ちが見つかり、周濠であることが確認できた。周濠の深さはトレンチ内の墳丘検出面から50cm下がり、標高1.9mを測る。また、墳丘方向に積まれた葺石は残りが悪く、原形をとどめていない。周濠内の堆積⑤a～⑥b層は埴輪片を多く含むが、特に⑥a層は瓦器片を多く含み、また⑥b層にも若干の中世遺物が含まれている。

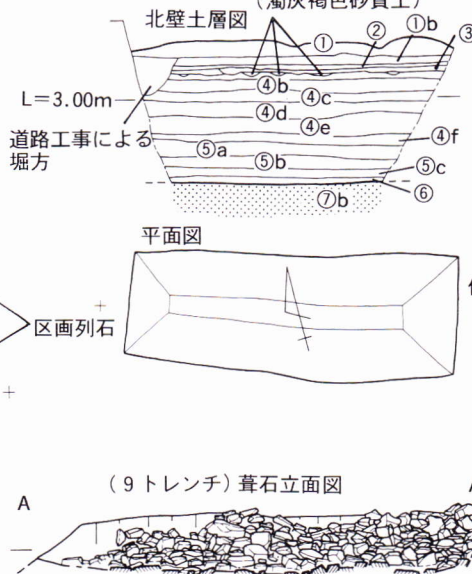
次に、東側では前方部北側にあたる地点において、前方部墳丘側から15度前後の比較的緩やかな傾斜を持つ葺石群が確認できた。葺石の最深部は標高約2.0mであり、周濠内の堆積は同じく2層に大別でき、葺石上には埴輪片が散乱した状況で見つかった。葺石は大きいもので30cm大のものがあり、大半は10cm前後の和泉砂岩の河原石を用いている。

11トレンチ（第6図） 前方部の西側の広がりを確認するために第3次調査時のトレンチの西側に設定したトレンチである。耕作面の標高は3.7m前後で、周濠底面の標高は1.9mであった。約55cmの耕作土、床土の下面に近世から中世の遺物を包含する灰茶色系砂質土層（③～④f層）がほぼ水平に堆積する。これらの層の出土遺物から④a、④b層が近世、④e、④f層が中世の層位とみられる。この下面に約60cmの暗灰色系の粘土層（⑤b・⑤c・⑥層）が堆積し、瓦器は⑥層まで含まれるが、特に⑤b・⑤c層から多く出土する。また、埴輪については④～⑥層に包含されるが、特に⑥層より大きな破片が出土している。調査の成果として、このトレンチの範囲は、周濠の内部であったため葺石等の遺構は検出

[9 トレンチ]

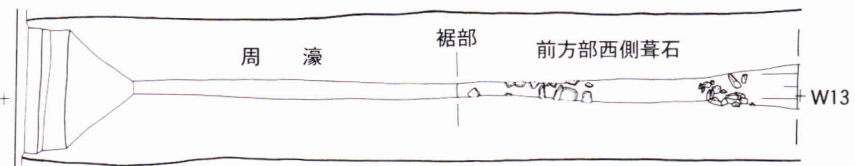
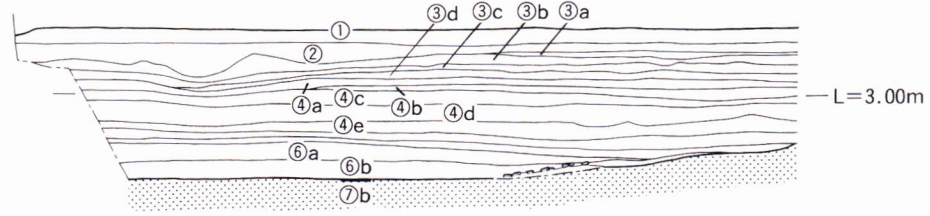
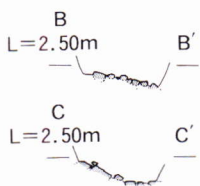
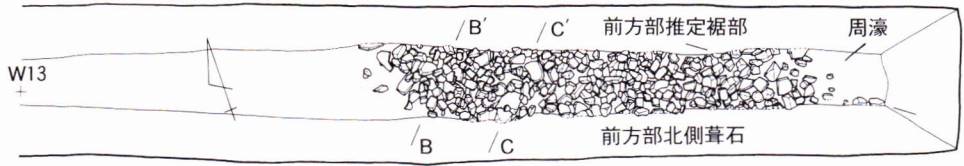
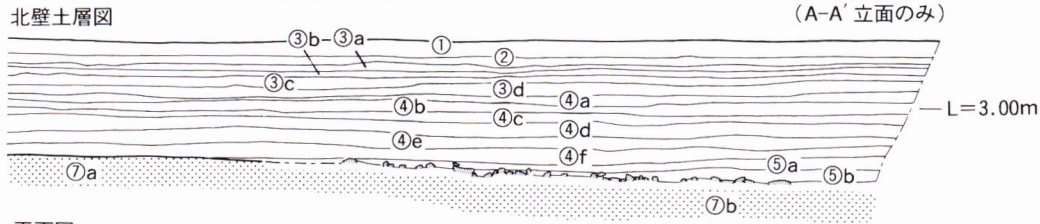


[11 トレンチ]



- 11・12 トレンチ土層名
- ① 耕作土
 - ①b 旧耕作土
 - ② 床土
 - ③a 灰褐色砂質土
 - ③b 淡灰褐色砂質土
 - ④a 淡茶色砂質土
 - ④b 灰茶褐色砂質土
 - ④c 灰褐色砂質土
 - ④d 暗灰褐色砂質土
 - ④e 暗茶灰色砂質土
 - ④f 灰褐色やや粘質土
 - ⑤a 暗青灰色弱粘質土
 - ⑤b 暗青灰色粘質土
 - ⑤c 暗灰褐色粘質土
 - ⑥ 灰色粘土
 - ⑦a 明黄色砂
 - ⑦b 灰色砂

[10 トレンチ]



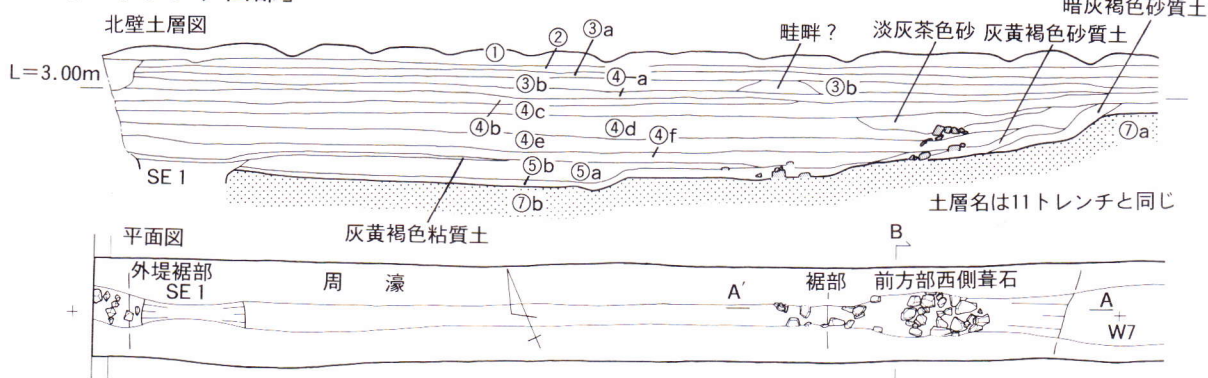
9・10 トレンチ土層名

- ① 耕作土
- ② 床土
- ③a 淡灰褐色弱砂質土
- ③b 茶褐色砂質土
- ③c 明茶褐色砂質土
- ③d 茶褐色砂質土
- ④a 茶灰色砂質土
- ④b 暗茶灰色砂質土
- ④c 灰褐色砂質土
- ④d 暗灰褐色砂質土
- ④e 灰褐色砂
- ④f 暗灰褐色弱粘質土
- ⑤a 暗灰色粘土
- ⑤a' 黒灰褐色弱粘質土
- ⑤b' 暗黒青灰色粘土
- ⑥a 暗黒灰色粘土
- ⑥b 黒灰色粘土
- ⑦a 明黄色砂
- ⑦b 灰色砂



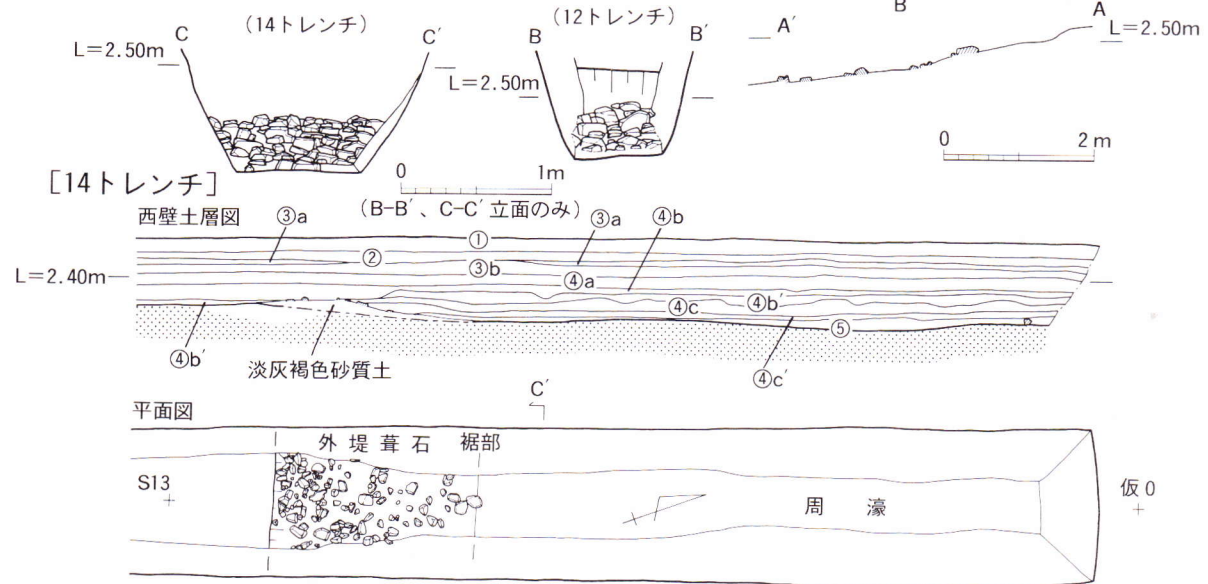
第6図 9~11 トレンチ実測図

[12トレンチ西部]



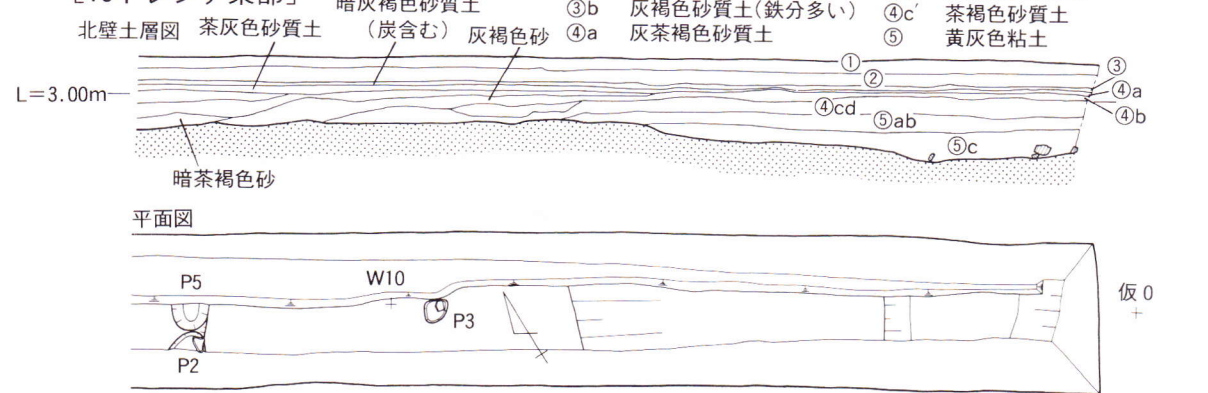
土層名は11トレンチと同じ

[14トレンチ]



- 14トレンチ土層名
- | | |
|-----------------|-------------|
| ① 耕作土 | ④b 茶灰褐色砂質土 |
| ② 床土 | ④b' 暗灰褐色砂質土 |
| ③a 灰褐色砂質土 | ④c 灰茶褐色砂質土 |
| ③b 灰褐色砂質土(鉄分多い) | ④c' 茶褐色砂質土 |
| ④a 灰茶褐色砂質土 | ⑤ 黄灰色粘土 |

[13トレンチ東部]



- 13トレンチ土層名
- | | |
|-----------|------------------------|
| ① 耕作土 | ④b 暗灰褐色砂質土 |
| ② 床土 | ④cd 暗茶灰色弱粘質土 |
| ③ 黄灰褐色砂質土 | ⑤ab 黒灰褐色粘質土 |
| ④a 灰褐色砂質土 | ⑤c 黒灰色粘質土(地山黄色土ブロック含む) |

第7図 12~14トレンチ実測図

されなかった。よって外堤の立ち上がり部分は、このトレンチより西側であると推定される。

12トレンチ（第7図、図版5-1・2） 前方部の西側における周濠の幅を確認するために設定したトレンチである。畑地である耕作土は約20cmの厚みを持ち、下層には10cmの床土がみられる。③a～④c層までは中世から近世にかけてほぼ水平堆積した層位である。④d・④e層は墳丘方向に立ち上がるやや厚い灰褐色主体の層で、特にW9の地点において中世に古墳の葺石を用い石垣状に積み上げた痕跡が窺えた。⑤a・⑤b層は上層とは異なる暗青灰色粘土を主体とする層位で、周濠内の埋土であり、⑤a層には瓦器が多く含まれるが、⑤b層には古墳時代の遺物以外は全く含まれていない。

東側におけるトレンチ内部の墳丘は、検出面で標高約2.9mであり、周濠の最深部は標高約1.8mを測り、比高差1.1mである。また、裾部と見られる基底石から墳丘へ連なる角度は約10度と緩やかで葺石は長さ20cm前後の河原石を用いている。葺石部のウラゴメは、灰黄褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の比較的締まった土を使っている。

西側の周濠内部には、中世の井戸とみられるSE1があり、またその西側に外堤葺石の一部とみられる葺石が確認できた（平面図参照）。このため、西側外堤は現在の道路下に存在したことが窺え、また周濠の幅は基底部で9mを有する。

13トレンチ（第7図） 今回の調査範囲内では最も西に位置するトレンチである。外堤のさらに外部の様子を確認するために設定したトレンチである。

耕作面の標高3.5mで約20cm前後の耕作土及び床土がそれぞれほぼ水平に層位する。床土下は比較的薄い包含層が堆積している。包含層の時期は3層に近世の遺物が混入するが、④a～④cd層は中世の層位とみられる。中でも④b層の上面と④cd層の上面には明確な遺構面があり、ともにピットや溝状の遺構を検出し、若干の瓦器などが出土している。また、東側のみに検出できた厚みが20cmの包含層⑤ab層には多くの黒色土器が含まれ、その下面に位置する遺構面には平安時代のピットが検出できた。その下面にはW8の地点から東側に落ち込む⑤c層があり、またW2の地点から東側に立ち上がる溝状のものであり、覆土内には埴輪以外の遺物は含まれず、古墳の葺石状の転石が含まれていた。

14トレンチ（第7図、図版5-3・4） 前方部の南側の外堤を確認するために設定したトレンチである。水田面の標高は2.9mで、耕作土・床土の下層が灰褐色系砂質土層（③～④c層）の包含層である。また、これらの層に瓦器が含まれるが、⑤層においては、古墳時代の遺物以外は含まれない。次に、円筒埴輪の出土状況であるが、特に③～⑤層に包含され、墳丘側の④c層において多く出土し、朝顔形埴輪・蓋形埴輪（第10図28・36）などがみられた。仮0よりS10mからS12mの地点において確認された葺石の中には長さ20cmの和泉砂岩の河原石がみられるが、多くは長さ10cm前後のものである。この地点における周濠幅は、第2次調査の造り出し部分の調査成果から推定すると10～11mである。周濠底面の標高は2.0m、葺石裾部の標高は2.1mであり、周濠底面からの葺石の積み上げる角度は15度以内と比較的緩やかである。

4. 出土遺物 (第8～10図)

今回の第4次および第5次調査において出土した遺物は、古墳の周濠および外堤周辺から出土した本来古墳に伴ったとみられる埴輪を中心に触れ、また古墳時代以降の遺構や包含層から出土した黒色土器、瓦器、輸入陶磁器などの概要について紹介する。

(1) 円筒埴輪 (第8・9図)

今回出土した埴輪は、ほとんどが円筒埴輪である。埴輪には第2次調査の成果と同様の須恵質、半須恵質、土師質のものがあり、前回の割合(須恵器：半須恵器：土師質＝6：1：6)と比較すると墳丘裾部の10トレンチ(⑤a～⑥層)の埴輪片407片の面積比率では2：1：4であり、また外堤部の9トレンチ(⑤a'～⑤b'層)の319片では8：1：8の割合で出土し、トレンチ全体からみても前方部に関しては土師質の割合が若干多いことが窺える。

また、埴輪の胎土はほとんどが酷似しており、土師質のものでは石英、長石、クサリ礫を多く含み、須恵質ではクサリ礫のかわりに黒色粒を多く含むものが大半である。

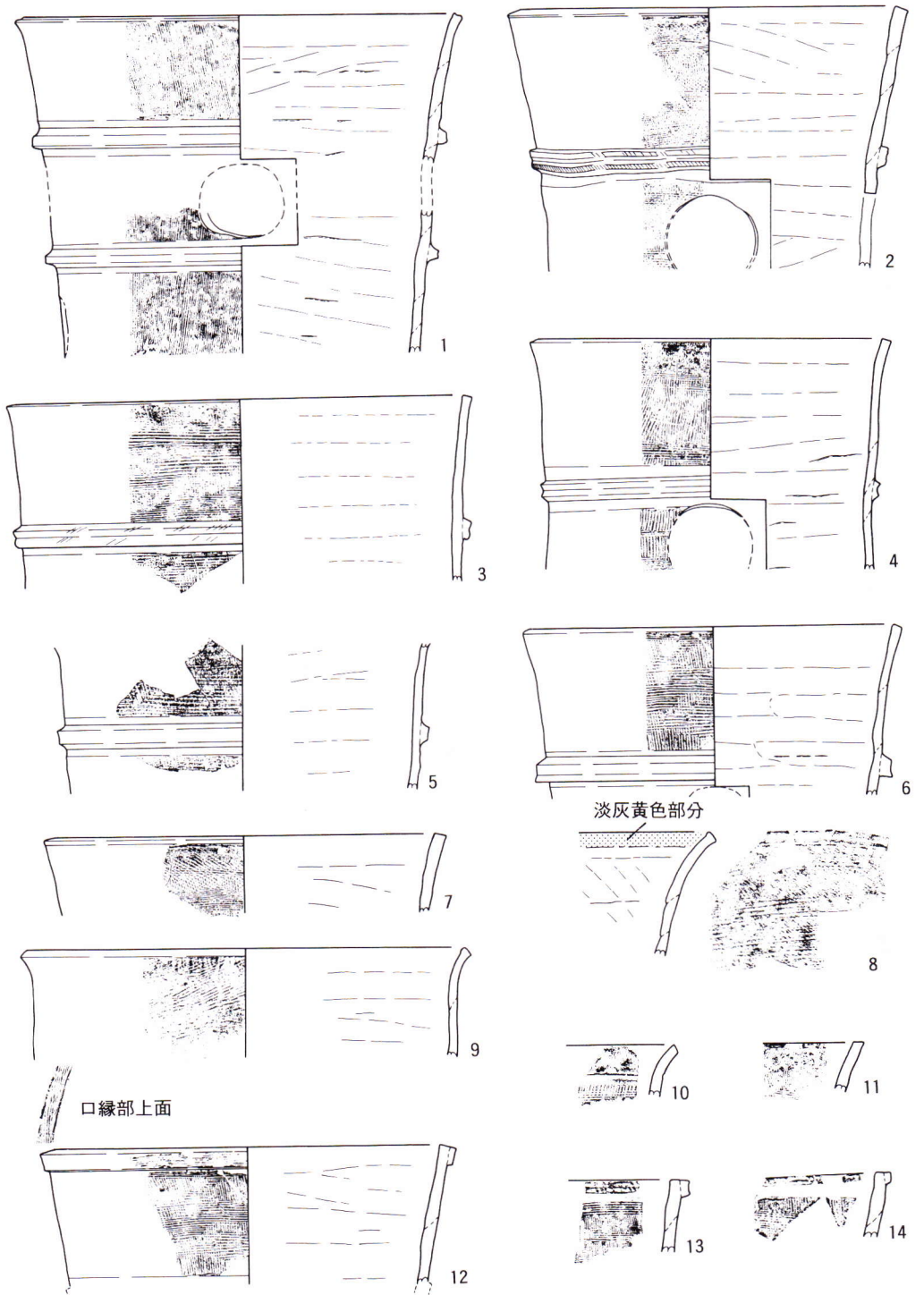
円筒埴輪における外面の調整は、一次調整においてタテハケを用いるものがほとんどであり、のちに須恵器技法であるタタキやC種ヨコハケ^(注7)、ヨコナデを二次調整に用いているものが多い。また、内面はほとんどヨコナデによって仕上げられている。

円筒埴輪の口径は30～40cmの間にあたり、また底部はいわゆる「淡輪技法」^(注8)を呈するもので径20～30cmを測り、器高は全体を復元できるものは出土していない。

まず口縁部周辺を中心にみると、体部最上段のタガから外反するもの(1・2・6・7)、ほぼ直立するもの(3)、口縁部直下において屈曲するもの(4・9・10)がある。また大きく外反する口縁をもつもの(8)や口縁端部外面にタガを張り付けているもの(12～14)がある。口縁部周辺の外面調整は比較的数量が少ないタテハケのみのもの(1)があるが、タテハケ→ヨコハケの順序により仕上げるものが圧倒的に多い。また、タタキ技法を用いるもの(2・7～9)は、タテハケ→タタキ→ヨコハケのもの(2・7・8)とタテハケ→タタキだけのもの(9)があり、その方向性は左上がりと右上がりの両者がみられる。また、(2)はタガ上にタタキを施している。内面調整はヨコナデとナナメナデにより下方からナデ上げている。

また口縁部は、全体的にみて強いヨコナデによって仕上げられるものが多い。なお、(8)の体部の色調が暗灰色を示すのに対して、口縁端部のみが内外面とも1～2cmの幅で淡灰黄色を呈する。この個体を倒立させて焼成したためであろうか。

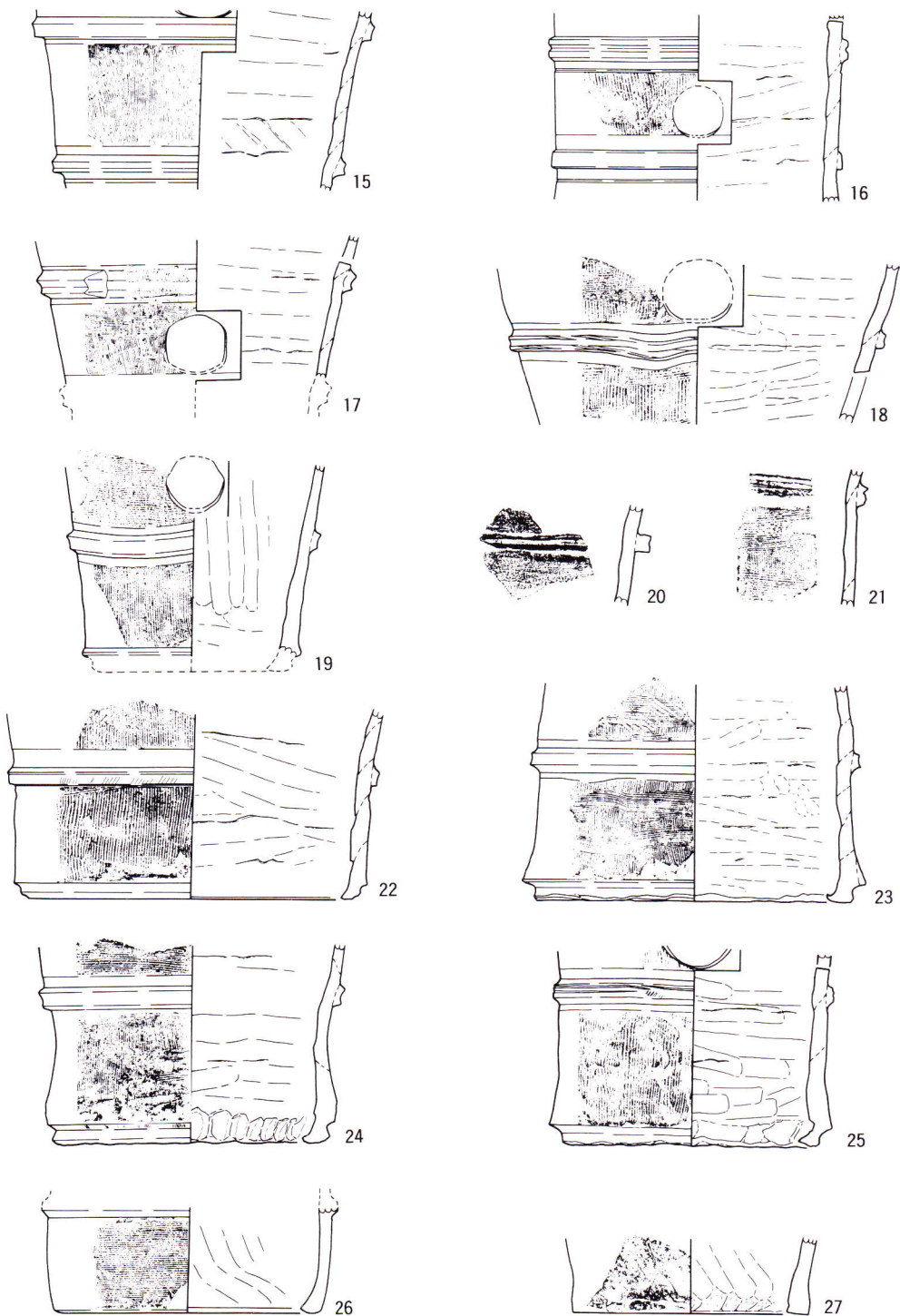
タガの形状は断面が台形状のもの(1・5)と「M」字状を呈する(2～4)があり、特殊なものとして(6)のように比較的高いタガをもち下方に垂下するものもある。口縁部にタガを施している(12～14)は、すべて台形状のタガを有し、タガ上をタタキ→強いヨコナデを施すもの(13・14)やタガ上と口縁上端面をヨコハケによって調整している



- 3 トレンチ：⑥層(2・7)
- 4 トレンチ：SDI 下層(5・10・12)
- 8 トレンチ：⑥層(11)
- 9 トレンチ：⑤a層(3)，⑤b層(8・9)
- 10 トレンチ：⑤層(1)
- 13 トレンチ：⑤層(14)，⑤b層(13)
- 14 トレンチ：④c層(6)，⑤層(4)



第8図 円筒埴輪 1



3 トレンチ：⑤層(21)，⑥層(19・26) 9 トレンチ：⑤b層(23・24)

6 トレンチ：⑥層(16・22・25)

13 トレンチ：⑤c層(18)

8 トレンチ：⑤層(20)

14 トレンチ：④c層(27)，⑤層(15・17)

0 20cm

第9図 円筒埴輪2

(12) がある。

また、特殊な調整をもつものとして、外面に沈線状の凹み部を1条施した(10)がある。胴部としては(15~21)がある。上方に向け広がるタイプのもの(17・18)やほぼ直立気味の(16)などがあるが、やや上面に向け広がるものが圧倒的に多い。

外面調整は、(15・16)はタテハケだけのものであり、特に(16)はタガの下のナデとタテハケの区域を沈線によって区切っている。(17)は一部タガの接合部が外れ、タガ接合以前の調整が明瞭に窺える資料である。この様子からタガ接合部の目印として凹線を用いている。この状況からタテハケ→凹線→タガという順序がみられる。また、(18)は灰褐色の外面の一部に赤褐色の朱塗がみられる貴重な資料である。

次にハケ調整についてであるが、ハケの条線密度はタテハケで5~6条/cmが多く、わずかに粗いハケ(4~5条/cm)のもの(18・25)が含まれる。ヨコハケはいわゆるC種ヨコハケが一般的であるが(19)にみるB種ヨコハケ(注9)がわずかに存在する。ヨコハケの場合もタテハケと同様の条線密度をもつハケが多いが、特に粗いハケ(2~4条/cm)のもの(5・8)が一定量含まれている。(20)は、今回出土した円筒埴輪の中では調整において特殊なものである。外面に断面四角形の高いタガを張り付け、内外面ともヨコナデによって仕上げている。今回の円筒埴輪におけるタガの高さは、0.6~0.8cmのものが多いがこの埴輪は1.3cmと極めて高いものである。また(21)は、タガにタタキおよび沈線を施した一例である。

最後に底部であるが、大半はいわゆる「淡輪技法」と呼ばれているもの(22~25)である。淡輪技法の底部は、底部外面に大きく段を成し、内側に折れ曲がるもので、本来つるなどの繊維質で輪を作り、その上に粘土を張り付けてさらに粘土を積み上げたと思われるもので、内側には強い指頭圧痕が残るもの(24・25)が見受けられる。外面の段内部の調整は未調整のもの(22・23)、ヨコナデを用いるもの(25)、タテハケ→ヨコナデを用いるもの(24)などがある。また底部の底面は繊維の圧痕が顕著にみられる。

底部から一段目のタガまでの外面調整は、タテハケだけのもの(22・25)、タテハケ→ヨコハケのもの(23・24)がみられ、(23)のように一段目タガより上部がタテハケ→ヨコハケ→タタキにより調整されるものがある。また、この底部はタテハケ以前に底部の段上部に粘土を張り付け、スカート状に広がりをもたせている。また(24)の底部は、粘土紐の積み上げ方向が逆であり、(25)は一段目の粘土接合部までの胎土が上部に比べ極端に悪く、特異なものである。次に淡輪技法以外の底部では、(26・27)がある。(26)の底部は、一段目のタガから下方は内側に向け屈曲するもので外面は丁寧なヨコハケ、内側はナメナデによって仕上げている。(27)は内外面とも左上がりのナメナデ調整が施されたもので、これらはともに須恵質のものである。

(2) 朝顔形埴輪 (第10図28~33)

朝顔形埴輪は、焼成が円筒埴輪と同様に須恵質や半須恵質、土師質がみられるが、器形

の全体を復元できるものは出土していない。大きく開く口縁部(28・29)は、復元口径55～60cmを測り、第3次調査までのものとほぼ同じである。

(28)は須恵質で、斜め上方にまっすぐにのび、端部がラップ状に大きく外反し、上端部が肥厚する。また、立ち上がり部との接合面では、斜格子状の粘土の浮きあがりが見られる。これは接合面を強化するために、頸部からの立ち上がり部の上端面に斜格子状の刻み目を入れるからである。外面の調整は、タテハケ→ヨコハケであり、上端部の一部にヨコハケ以前のタタキ調整がみられる。内面の調整はヨコハケ→ヨコナデである。(29)

は、外反する口縁部の中間に断面台形のタガを付けている。外面の調整は、6条/cmのタテハケ、内面の調整は5条/cmのタテハケ→7条/cmのヨコハケである。頸部については、

(30)が屈曲部のタガより上部の立ち上がり部の調整がタテハケ、肩部へ続く下部は丁寧な7条/cmのヨコハケである。復元すると口縁は、(29)とほぼ同じ角度をもって立ち上がるものであるとみられる。(31)は屈曲部に断面三角形のタガが付く。外面調整が4条/cmの斜めヨコハケ、内面がヨコナデ調整である。(32)の肩部外面調整がタテハケ、胴部外面がタテハケ→ヨコハケ、内面が下方からナデ上げた痕跡や指頭の圧痕がみられる。

(33)の胴部外面は、2～3条/cmのタテハケ、内面がヨコナデ調整である。

(3) 形象埴輪 (第10図34～37)

車駕之古墳のこれまでの調査において発見された形象埴輪には、蓋・盾・家・冪^(注10)などがある。今回の調査において見つかった明確なものは蓋形埴輪(34～37)であった。

(34・35)は立ち飾りの部分であり二本単位の沈線がみられる。(34)は明瞭なハケ調整が確認できた須恵質のものである。(36)は差し込み部分の軸受け部で、乳褐色の色調をもつものであり、内外面ともハケ調整を用いている。また、外面にはハケ調整のちに立ち飾り部との接合痕である粘土が付着している。(37)は、(36)と同じ部分の軸部であり、外面にはタテ方向のハケ調整がみられる。

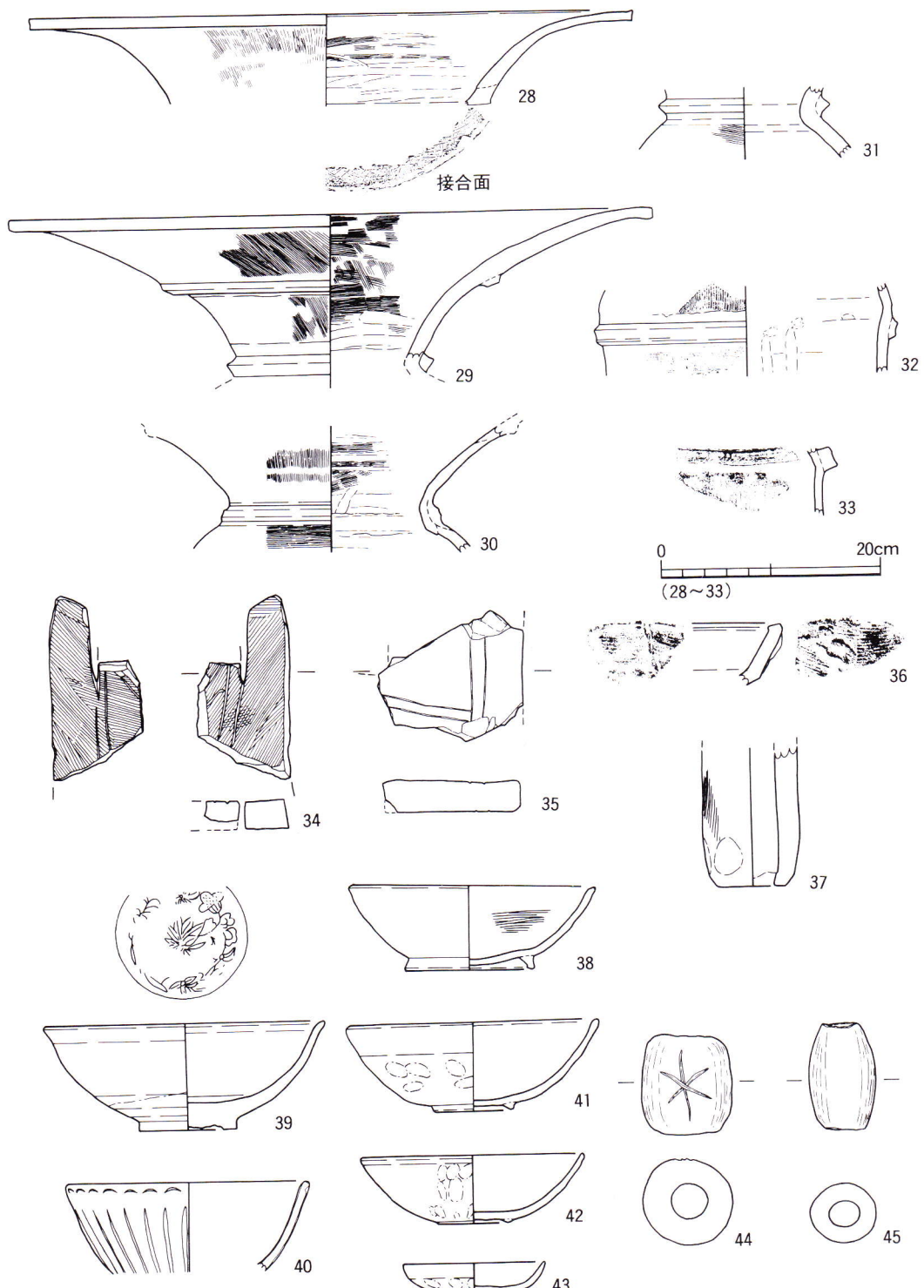
以上の形象埴輪の胎土は、土師質のもの(35～36)では長石、石英が含まれ、中でもクサリ礫が目立つ。また、須恵質の(34)は、長石と黒色砂粒が含まれている。

(4) 平安時代～室町時代の遺物 (第10図38～43)

(38)はいわゆる黒色土器A類とされる碗である。やや内彎する器形をもち、口縁部を強いヨコナデによって仕上げている。内外面とも剝離により調整は不明瞭であるが、両面ともヘラミガキ調整であったとみられる。また胎土には結晶片岩^(注11)が多く含まれ、搬入品であることが明らかである。

(39)は中国製白磁碗である。やや外反する口縁部、肉厚で削り出しによる高台をもつ。胎土は白灰色を呈し、外下半部を施釉する。また、内面見込みにはスタンプによる花卉を施している。この器形は森田勉氏によるC類^(注12)に比定できる。

(40)は中国製青磁碗である。外面の蓮弁は、ヘラ先による面取りを行ったのち、さらにヘラ先で蓮弁を表現し、また丸みをもつ剣頭を削りだしている。



- 2 トレンチ：④c層(32)，⑤層(29・33)
- 3 トレンチ：⑥層(35・37)
- 4 トレンチ：⑤層(41)
- 6 トレンチ：⑤g層(31)
- 7 トレンチ：⑤層(39)，SK 1(42)，P7(43)
- 9 トレンチ：⑤b層(30)，SD1(34)
- 10 トレンチ：⑤・⑥層(44)
- 13 トレンチ：④層(40)，⑤b層(38)
- 14 トレンチ：④b層(45)，④c層(28・36)

第10図 朝顔形埴輪・形象埴輪・平安～室町時代の遺物・土錘

(41・42)は瓦器椀である。(41)は口縁部周辺に強いヨコナデ調整を施し、下方は指頭による圧痕によって仕上げている。高台は断面が三角形のものである。(42)は外面の指頭による調整が口縁部周辺まで行われたもので、高台は紐状に張り付けられている。これら両者とも剥離がひどく内面における暗文等は観察できなかった。また、これらを比較すれば(42)の方がやや時期が下るものとみられる。(43)は瓦器皿である。内面および外面の約1/2まではヨコナデ調整を用い、底部周辺を指頭圧痕によって調整している。

(5) 土錘 (第10図44・45)

(44・45)はやや肉厚な土錘である。これらの土錘は微細な良質の粘土を用いた土師質のもので、(44)にはヘラ先による記号が刻まれている。

5. 小 結 (第11図)

今回の範囲確認調査により、本古墳の墳形や周濠形態について新たな知見を得ることができた。従来調査成果に今回の成果を合わせて、項目ごとに記してまとめたい。

(1) 古墳の墳形と規模

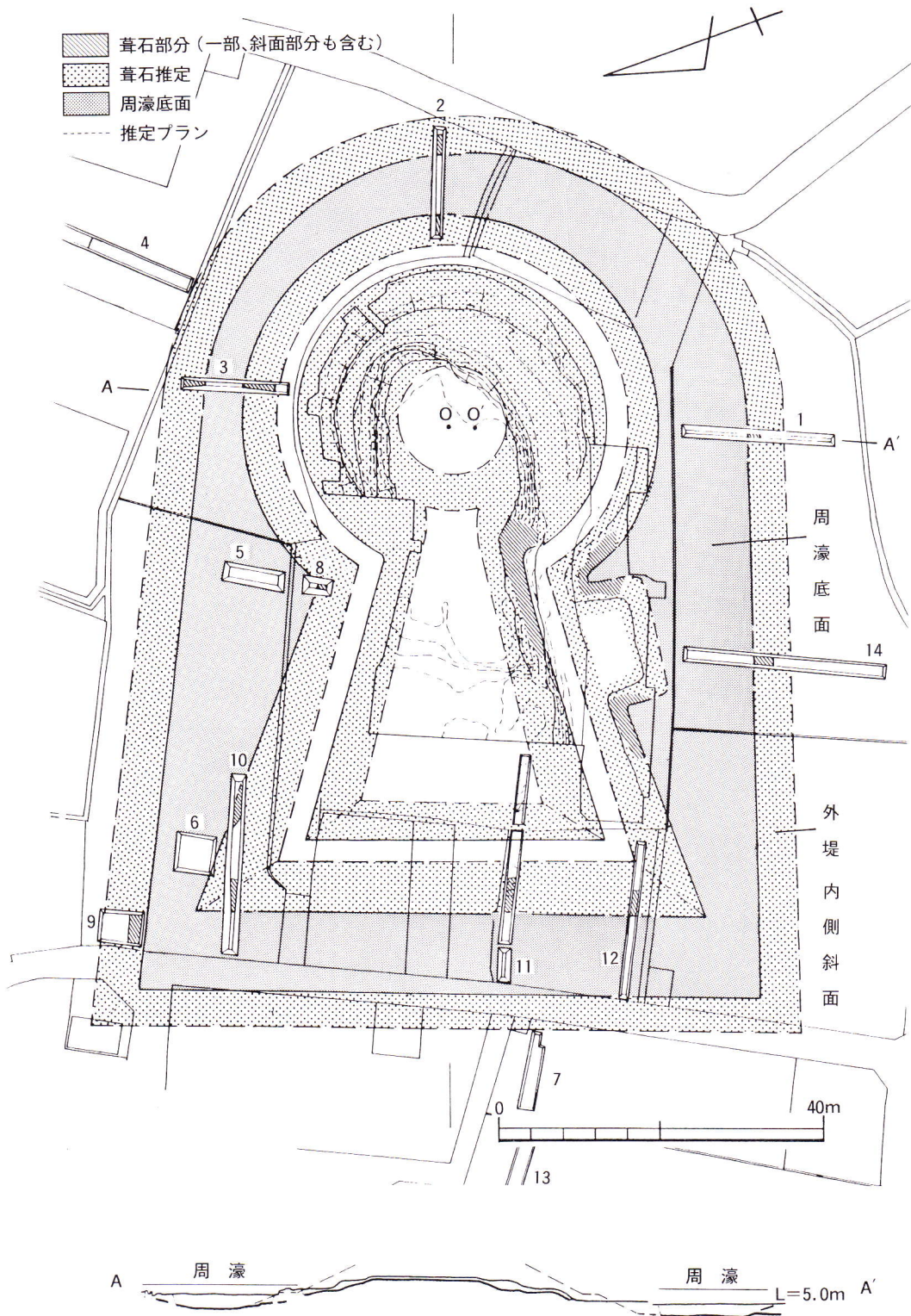
狭い範囲のトレンチ調査で、基底石がほとんど残っていなかったことにより墳裾部の確定はできなかったが、周濠形態や第2次調査時のくびれ部の調査状況を参考にして推定復元は可能となった。本古墳は、前方部を西に向けた前方後円墳で、主軸はN-70°-Wである。つまり、前方部は真西より北へ20°振っている。復元された古墳の規模は、全長約86m、後円部直径約51m、くびれ部幅約33m、前方部幅約62m、前方部長約41m、後円部の高さ4.0m以上である。段築については、第2次調査で二段以上と判明していたが、くびれ部の幅よりみて二段築成とするのが妥当と考えられる。造り出しは5・8トレンチの調査により、南側にのみついていたのが判明した。

(2) 古墳の構造

12トレンチでは、前方部一段目葺石のウラゴメによく締まった褐色系砂質土が用いられているのが顕著に確認された。本古墳は、砂地をベースにして築かれているために、墳丘一段目の段を構築するにあたっては、葺石を設置する傾斜面を造ったのちに、褐色系によく締まった土を置き（置いてから締めたかもしれない）、葺石を設置したものであろう。よく締まった灰褐色土や黒褐色土は、第2次調査時にも後円部の墳丘裾部においても確認されており、墳丘構築にあたり、基盤となる部分は一度固められて、その後葺石設置作業が行われたものと考えられる。

(3) 周濠と外堤

範囲確認調査により、古墳本体と外堤との位置関係が主軸を中心に左右対称にならない、つまり周濠幅が地点により異なる事実が明らかになった。後円部の周囲では、3トレンチで周濠の底面幅は約5m、2トレンチで約7m、1トレンチで約12mとなり、古墳南側ほど周濠幅が広がる傾向がみられた。そのため、後円部の中心が第11図の点O付近に求め



第11図 墳丘・周濠復元図（800分の1，番号はトレンチ番号）

られるのにたいして、外堤の基底部の弧の中心は点O'となり、点Oから南へ3mほどずれて求められた。くびれ部も同様に、南側では底面幅推定約20mであるのに対して北側では推定約16mと南側が広がっている。前方部の周濠については、12トレンチの成果により底面幅約9mと推定できる。造り出しが墳丘南側にのみ存在することと考えあわせて、古墳南側に対する意識を強く感じる古墳設計となっている。外堤の構造としては、9トレンチでみられたように、1.4mほどの間隔に長さ20~30cmのやや大振りな和泉砂岩の礫を列石として並べ、基底石を含めて長方形の区画をつくり、その内部を長さ10cmほどの和泉砂岩の小礫で充填するものである。この構築方法は、第2次調査によりあきらかになったくびれ部付近の墳丘一段目の葺石の積み方と共通し、充填石材に長さ20~30cmの大振りな石材を使用し、一部に緑色片岩をまじえる墳丘二段目の葺石構築方法とは区別されるものである。

外堤の上部と外部構造は、削平により不明である。標高3.8mでベース層が検出された4トレンチ南端の状況と3トレンチ北端の葺石の存在（標高約2.6m）よりみて、外堤の周濠側葺石は、現況では幅5m以内におさまるものと推定できる。外堤を含めた規模では、外堤の周濠側の基底部間で全長約103mを測り、外堤葺石部を含めると推定約112mとなる。外堤上部の削平を勘案するなら本来、全長120mにも及んだ可能性が高いとみられる。

1986年の木ノ本Ⅲ遺跡の調査時に「外周溝」の可能性が指摘された「大溝」は4トレンチでも検出され、長さ70m以上も続いていることが判明した。また、13トレンチの東端でも埴輪を包含する幅6m以上の溝状遺構が検出され、外堤の北側と西側で外堤に沿った溝が存在するようである。ただし、「大溝」は、検出面よりみて中世期の遺構ととらえるべきで、葺石状の石材にも区画列石は認められない。また、「大溝」の底面レベルが標高3.4mであり、13トレンチの溝状遺構底面は標高2.2mとかなり異なっており、同一の溝とはとらえられず、外周溝とは想定しがたい状況である。ただし、葺石類似の円礫と埴輪が多く出土することにより、外堤の外側のプランを何らかの形で反映している可能性があり、注意すべき遺構と言える。

（4）埴輪

出土した埴輪は、コンテナで約15箱分程度である。葺石の遺存状態の良好であった9・10トレンチでの出土が多かった。また各トレンチで古墳側と外堤側の両方で円筒埴輪・朝顔形埴輪の出土が認められ、外堤上には古墳本体と同様に円筒埴輪と朝顔形埴輪が並べられていたものと考えられた。第2次調査時のくびれ部付近出土の円筒埴輪に較べて、今回はやや土師質焼成の埴輪の出土が目立ったが、形態・技法的に特に大きな差異は現時点では認められない。全体としては無黒斑で、タテハケのちC種ヨコハケ調整が多くみられ、タタキ技法をもつ埴輪も一定量みられた。ただし、円筒埴輪の外面調整では、タガをつける以前にヨコハケ調整がされたり、ヨコハケ調整の後にタタキ技法が認められる個体（製作段階のタタキ技法とは区別されるべきだが）も確実に存在しており、本古墳に使用され

た埴輪全体の分類、製作方法の解明が課題となった。底部では淡輪技法のものが大半を占める。底部の段の付近には、表裏ともに成形時のユビオサエの痕跡が明瞭に観察され、段の上部に粘土を付け足す技法もみられた。

(5) 古墳築造年代と位置づけ

古墳の平面プランは、大阪府岬町の西陵古墳（全長約200m、5世紀第2四半期頃）や大阪府藤井寺市の市野山古墳（允恭天皇陵古墳、全長約220m、5世紀第3四半期頃）に類似する。円筒埴輪では、川西宏幸氏の^(注15)Ⅳ期に平行し、5世紀中頃から後半期の年代が考えられる。最近、近接する茶臼山古墳において埴輪列が検出され、茶臼山古墳の埴輪の様相が明らかになった。^(注17)茶臼山古墳の円筒埴輪は、淡輪技法の底部をもち、タテハケのちヨコハケ・ナデ調整がされるとともにタタキ技法が多くみられる。また、タガの突出は車駕之古址古墳のものよりも高く、古い要素を示している。全体として、西陵古墳の埴輪に近いものである。車駕之古址古墳は、円筒埴輪よりみて西陵古墳・茶臼山古墳より後出し、5世紀第3四半期を前後する頃の築造とみられる。国内唯一の金製勾玉を出土し、盾形周濠・段築・造り出しを備えた本格的な中期古墳である本古墳は、古墳の範囲という点では県下で傑出した存在となり、その重要性は今回の調査によりさらに高まったと言える。

(注1) 「しゃがのこし」とも呼ばれる。(和歌山市教育委員会『車駕之古址古墳発掘調査概報』1993 参照)

(注2) 日下雅義「紀ノ川の河道と海岸線の変化」『歴史時代の地形環境』(1980)

(注3) 額田雅裕「和歌山市木ノ本付近における微地形と遺跡の立地」『和歌山市立博物館研究紀要』5 (1990)

(注4) 同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡 発掘調査報告書』(1989)

(注5) 注1文献

(注6) その後の土のう袋の水洗洗浄作業もあわせて、現在までにガラス玉が約700点とガラス製管玉1点、碧玉製管玉2点が確認されている。

(注7) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 (1978)

(注8) 坂靖・穂積裕昌「淡輪技法の伝播とその問題」注4文献所収

(注9) 注7文献

(注10) 注1文献

(注11) 結晶片岩は、主として紀ノ川南岸を形成する三波川変成帯に含まれる。

(注12) 森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2 (1982)

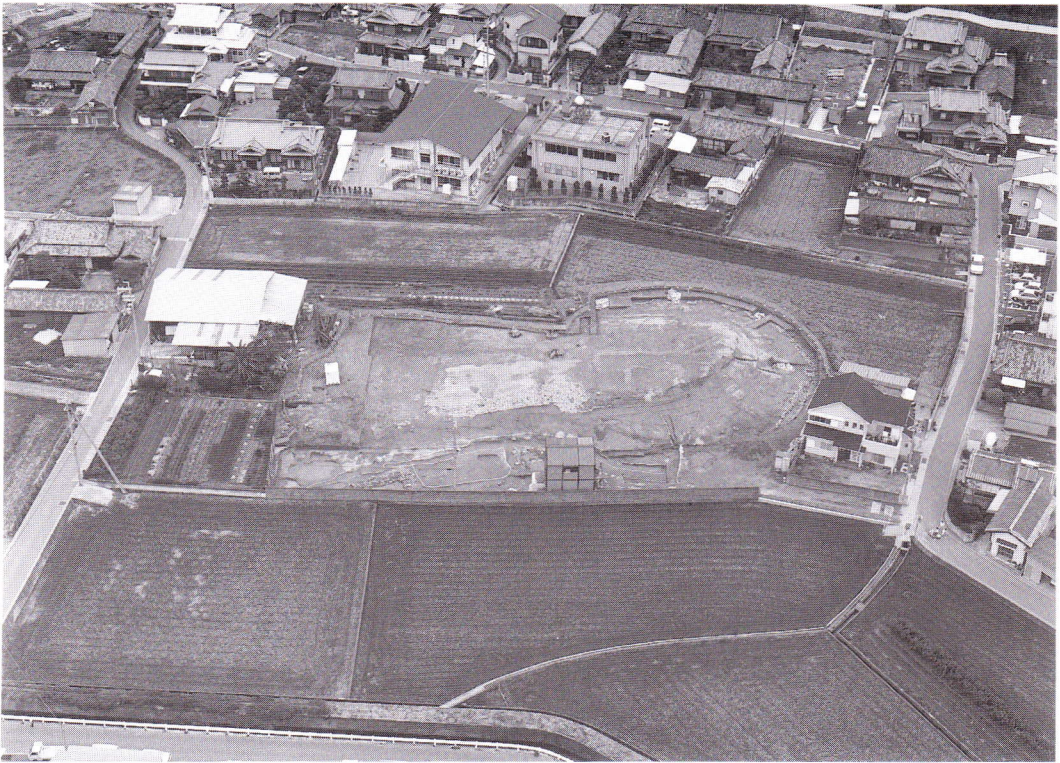
(注13) 墳丘二段目の葺石では、幅1.1~1.4m間隔に区画列石が設置されていた。(注1文献)

(注14) 注7文献

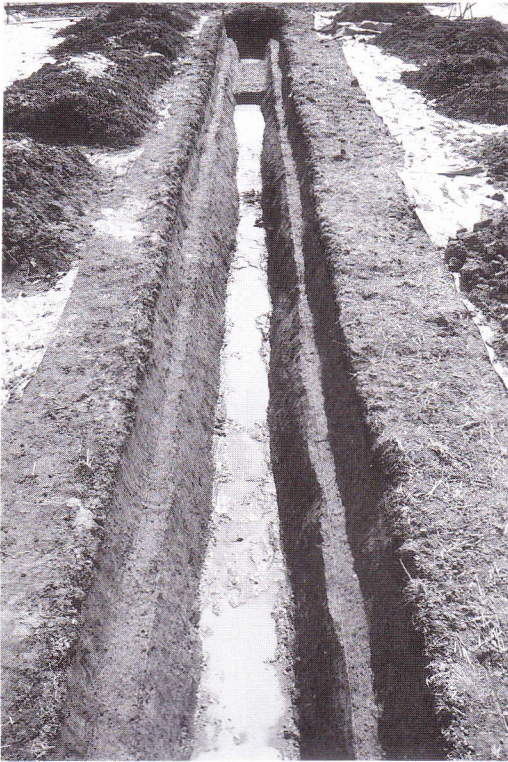
(注15) 近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社(1992)

(注16) 注7文献

(注17) 1993年10~11月、当事業団調査実施。現在、遺物整理中。



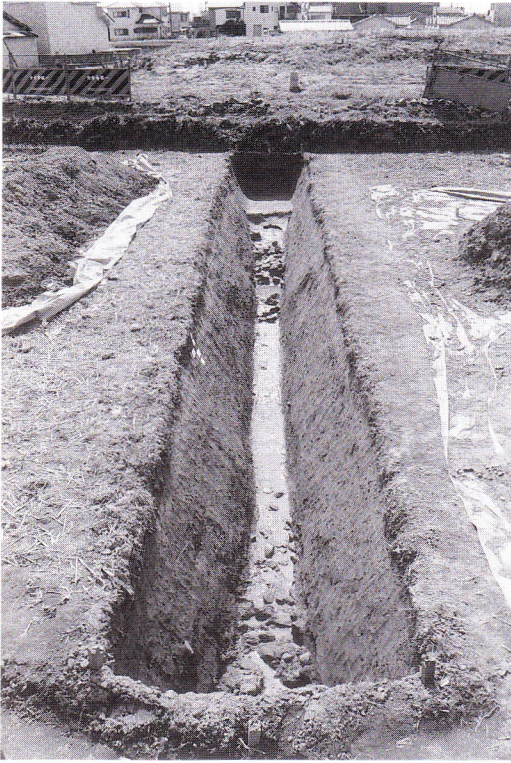
1. 車駕之古址古墳航空写真（第2次調査時。南から）



2. 1トレンチ（北から。手前が古墳側）



3. 2トレンチ（東から。手前が外堤側の葺石）



1. 3トレンチ（北から。手前が外堤側）



2. 3トレンチ（北から。後円部側の葺石）



3. 4トレンチ（北から。中央にSD1）



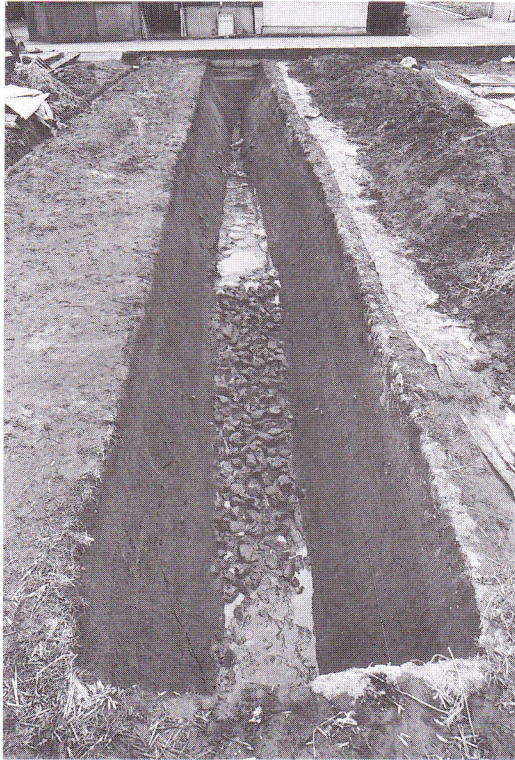
4. 4トレンチ（南から。SD1）



1. 5トレンチ（北から。周濠内の堆積）



2. 8トレンチ（北から。前方部北側の葺石）



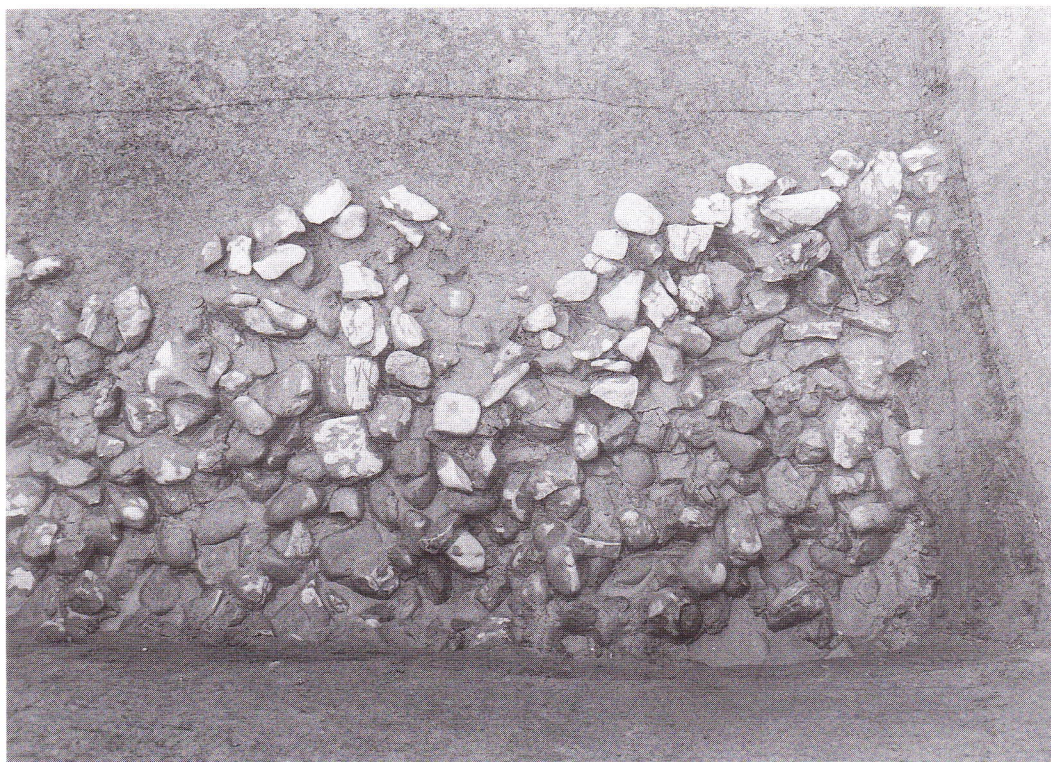
3. 10トレンチ（東から。前方部北側葺石）



4. 10トレンチ（西から。前方部端部）



1. 9トレンチ（南から。外堤側の葺石）



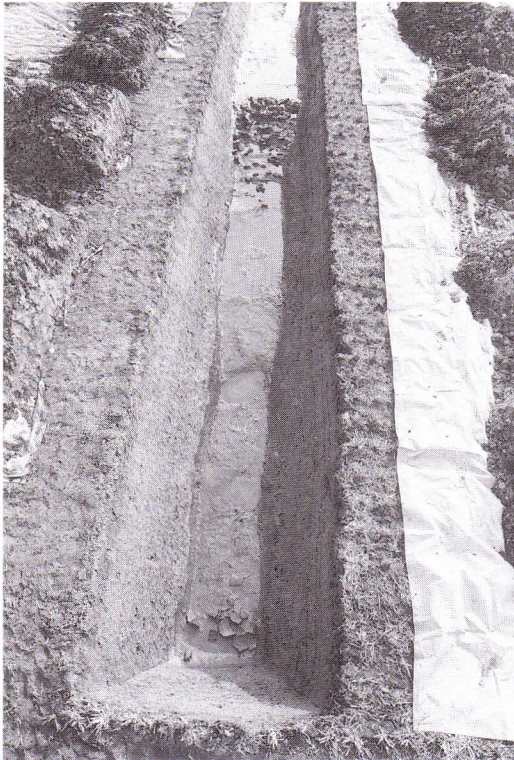
2. 9トレンチ（南から。外堤側の葺石）



1. 12トレンチ（西から。奥が古墳の前方部）



2. 12トレンチ（西から。前方部端部の葺石）



3. 14トレンチ（北から。手前が前方部側）



4. 14トレンチ（北から。外堤側の葺石）



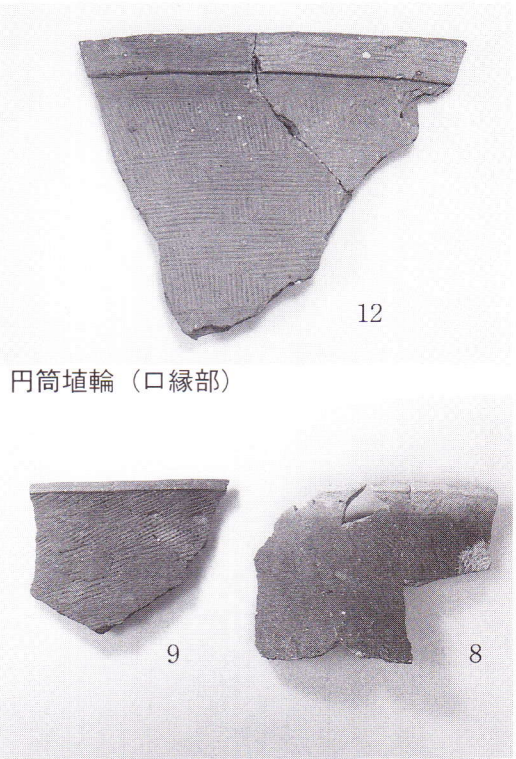
円筒埴輪



円筒埴輪

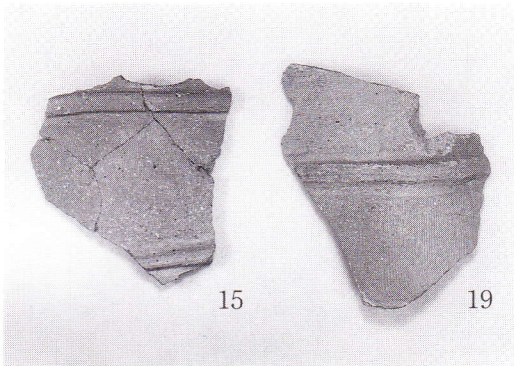


円筒埴輪



円筒埴輪（口縁部）

円筒埴輪（口縁部）



円筒埴輪（胴部）



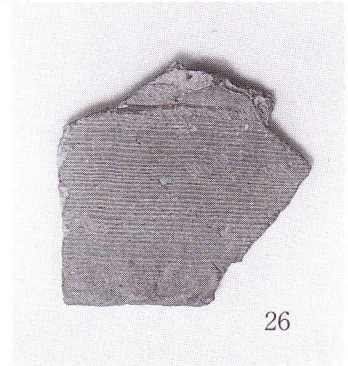
円筒埴輪（胴部）



円筒埴輪（底部）



円筒埴輪（底部）

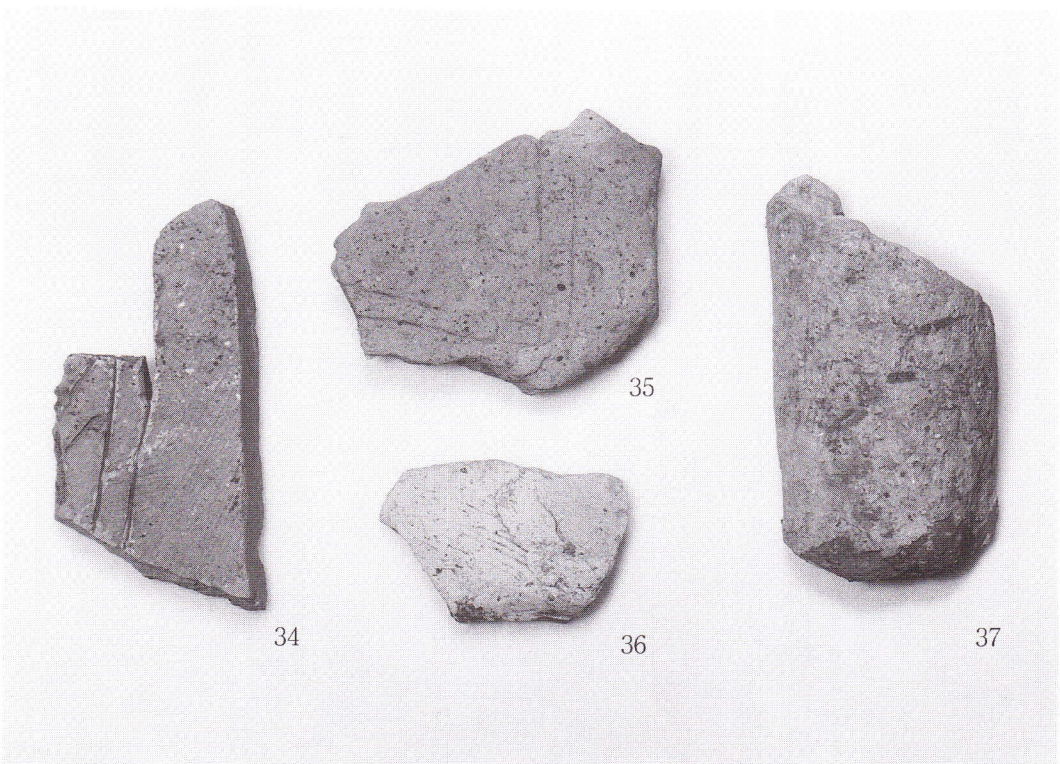


円筒埴輪（底部）



28

朝顔形埴輪



34

35

36

37

形象埴輪（蓋）

平成6年3月31日発行

車駕之古址古墳 範囲確認調査概報

編集・発行 財和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 西岡総合印刷株式会社

© 財和歌山市文化体育振興事業団 1994